塩竈市文化財調査報告書第12集

# 御釜神社境内遺跡

東日本大震災で被災した御釜神社社務所の
建て替え工事に伴う遺跡確認調査

令和３年９月

塩竈市教育委員会

# 御釜神社境内遺跡

東日本大震災で被災した御釜神社社務所の

建て替え工事に伴う遺跡確認調査

# 序　文

御釜神社は、鹽竈神社の末社で、古来製塩が行われたという「甫出の浜」に鎮座し、塩づくりの製法を伝授した「鹽土翁神（しおつちのおじのかみ）」を祀っています。

また、境内には、塩作りに用いられた神釜と呼ばれる四口の鉄製の釜が祀られており、変事が起こる前に、御釜を満たす水の色が変わるといわれ、日本三奇の一つに数えられており、松尾芭蕉が塩竈を訪れた際、神釜を拝したことが「奥の細道」に記されています。

さらに、古代の製塩方法を伝える特殊神事「藻塩焼神事（宮城県無形民俗文化財）」が、毎年７月４日～6日に斎行され、海藻(ホンダワラ)を用いて濃度の高い塩水（鹹水（かんすい））を作り、これを煮詰めて塩を作る一連の工程が儀式として再現されます。

このように御釜神社は、“塩づくり”をとおして塩竈の歴史や文化、産業、風土に大きなかかわりをもち、本町商店街の中央に位置していることから、市民にも馴染みの深い身近な祈りや憩いの空間になっています。

本報告書は、東日本大震災により被災した御釜神社社務所の建て替え工事に伴い、志波彦神社鹽竈神社のご理解のもと、宮城県教育庁文化財課の協力をいただきながら実施した発掘調査の成果を刊行するものです。

文化財をとおして地元の歴史を知っていただくことが地域振興の一助となるものと信じ、今後も調査研究ならびに普及啓発に力を入れていく所存ですので、本書を一読いただき、ぜひ忌憚のないご指導、ご助言を賜れましたら幸甚です。

最後になりますが、発掘調査から本書の執筆・編集に至るまでご尽力くださいました高橋守克氏をはじめ、発掘調査にご理解とご協力をいただきました志波彦神社鹽竈神社、宮城県教育庁文化財課及び関係機関の皆さまに厚く御礼を申し上げます。

令和３年９月

塩竈市教育委員会
教育長　吉木　修

# 例　言

1．本書は塩竈市本町６番１号に所在する「御釜神社境内遺跡」の遺跡確認調査報告書である。調査は鹽竈神社が計画した御釜神社社務所の建て替え工事に伴って実施した。

2．発掘による確認調査は塩竈市教育委員会が主体となり、塩竈市教育部生涯学習課が担当した。調査員として高橋守克（塩竈市文化財保護委員会会長、日本考古学協会員）が当たり、高橋栄一、古田和誠、山中信宏（宮城県教育庁文化財保護課）の協力を得た。

3．発掘調査と資料整理・報告書の作成に関しては、下記の方々と関係機関から指導・助言および協力を賜った（敬称略、順不同）。なお、発掘調査及び遺物整理・報告書関係者の所属および役職等は、それぞれ当時のもので表記した。

(1) 発掘調査

≪協力者≫　宮城県教育庁文化財保護課、多賀城市埋蔵文化財調査センター
鍵　三夫、小野道教、茂木裕樹、柏木岳史（鹽竈神社）
㈱鈴木工務店（代表取締役社長 鈴木美範）、エム・ケー建築設計事務所

≪従事者≫　遠藤　仁、阿部理美、大場　明、青木陽一郎、大森弘靖、渡辺誠一郎、
佐藤福実、佐藤　文（塩竈市教育委員会）

(2) 遺物整理・報告書作成

≪協力者≫　鹽竈神社、松島町教育委員会、多賀城市埋蔵文化財調査センター
茂木裕樹（鹽竈神社）、森田義史・米城百合子・泉田成美（松島町教育委員会）、
新野一浩（宗教法人瑞巌寺）、高橋義行（利府町教育委員会）、新野のり子、
相原淳一（東北歴史博物館）、藤方博之（東北大学）、宮田尚夫、
阿部光浩・大和田庄治・白谷明彦（塩竈市教育委員会）

≪従事者≫　川名直子、渡辺誠一郎（塩竈市教育委員会）

4．本書における土色の記述に関しては、『新版標準土色帳』（小山・竹原：1973）に依拠した。

5．本書の執筆・編集については、高橋守克が行った。

6．発掘調査の記録と出土遺物は、塩竈市教育委員会が保管している。

**【調査要項】**

1．遺 跡 名　　御釜神社境内遺跡
2．所 在 地　　宮城県塩竈市本町６番１号
3．調査原因　　東日本大震災で被災した御釜神社社務所の建て替え工事
4．調査期間　　平成 24 年（2012）8 月 6 日～8 月 10 日
5．調査面積　　約 44 ㎡
6．調査主体　　塩竈市教育委員会（調査担当：塩竈市教育部生涯学習課）
7．調 査 員　　高橋守克（塩竈市文化財保護委員会会長、日本考古学協会員）
8．調査協力者　高橋栄一・古田和誠・山中信宏（8 月 8 日、宮城県教育庁文化財保護課）

# 目　次

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 2
　第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 2
　第２節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 3
第Ⅲ章　調査の方法と経過 …… 5
第Ⅳ章　基本層序 …… 6
第Ⅴ章　発見した遺構と遺物 …… 8
　第１節　発見した遺構 …… 8
　第２節　発見した遺物 …… 10
　第３節　考　察 …… 20
第Ⅵ章　まとめ …… 32
引用参考文献 …… 36

# 図・表・図版目次

【 図 】

第１図　御釜神社境内図（東日本大震災前） …… 1
第２図　御釜神社の位置と周辺の遺跡 …… 4
第３図　調査区平面図 …… 5
第４図　A・B・C トレンチ断面図 …… 7
第５図　御釜社の社家と荷堀（奥州名所図会・神竈社） …… 8
第６図　建物跡・塀跡平面図 …… 9
第７図　塀瓦実測図１ …… 11
第８図　塀瓦実測図２ …… 13
第９図　塀瓦実測図３ …… 14
第 10 図　塀瓦実測図４ …… 16
第 11 図　塀瓦・丸瓦実測図５ …… 17
第 12 図　陶磁器・洋釘・板材片実測図 …… 19
第 13 図　瑞巌寺常住門と一本柱塀・塀瓦 …… 21
第 14 図　瑞巌寺御修復帳（文政期）」書き起し（部分） …… 21
第 15 図　奥州名所図会・法蓮寺 …… 22
第 16 図　小池曲江・鹽竈神社図（部分） …… 22
第 17 図　明治 11 年・市図書館版画（部分） …… 23

第 18 図 明治 11 年・市図書館版画（部分）……24
第 19 図 明治 13 年か・神社博物館絵図（部分）……24
第 20 図 明治 10 年頃・御釜社図 ……24
第 21 図 封内神社修繕帳（第Ⅰ期） ……27
第 22 図 東北大学修復帳（第Ⅱ期） ……27
第 23 図 県図書館修復帳（第Ⅱ期） ……27
第 24 図 下座所絵図と所々神社絵図（第Ⅲ期） ……28
第 25 図 奥州名所図会の神竈社と藻塩焼神事（第Ⅳ期） ……29
第 26 図 御釜社平面図と明治 10 年頃・御釜社図（第Ⅴ-1 期） ……29
第 27 図 明治 11 年・市図書館版画と明治 13 年頃・神社博物館絵図(第Ⅴ-2 期) ……30
第 28 図 明治 33 年・鹽竈神社境内図銅版画（第Ⅵ期） ……30
第 29 図 絵はがき（社務所と社殿）（第Ⅶ期） ……31

【 表 】

第 1 表 塀瓦破片観察表 ……19
第 2 表 御釜神社と瑞巌寺の丸瓦比較表 ……23
第 3 表 御釜神社の絵図・写真等一覧表 ……26

【図版】

図版 1 御釜神社境内遺跡調査 1 （発掘状況）……38
図版 2 御釜神社境内遺跡調査 2 （発掘状況）……39
図版 3 御釜神社境内遺跡調査 3 （発掘状況）……40
図版 4 御釜神社境内遺跡調査 4 （発掘状況）……41
図版 5 御釜神社境内遺跡調査 5 （発掘状況）……42
図版 6 御釜神社境内遺跡出土遺物 1 ―塀瓦 ……43
図版 7 御釜神社境内遺跡出土遺物 2 ―塀瓦、丸瓦、陶磁器、洋釘、板材、貝類 ……44
図版 8 御釜神社絵はがき（神釜と噴水）……44
図版 9 陸前國宮城郡塩竈村一森山鎮座鹽竈神社《版画》 ……45
図版 10 明治 33 年・陸前國鹽竈神社境内図附松嶋及附近名所 ……45
図版 11 江戸時代中期とされている御釜神社を描いた絵図（部分）……46

# 第Ⅰ章　調査に至る経過

本調査は、平成 23 年（2011）3 月 11 日に発生した東日本大震災で被災した鹽竈神社の末社の一つである御釜神社社務所の建て替え工事に伴う発掘による遺跡確認調査である。平成 24 年（2012）7 月 25 日に塩竈市教育部生涯学習課・阿部理美係長より塩竈市文化財保護委員会会長である高橋守克に、御釜神社の社務所の建て替えとそれに係る文化財の取り扱いについて相談があった。

その際、御釜神社及びその所在地に関して次のようなことが想定された。

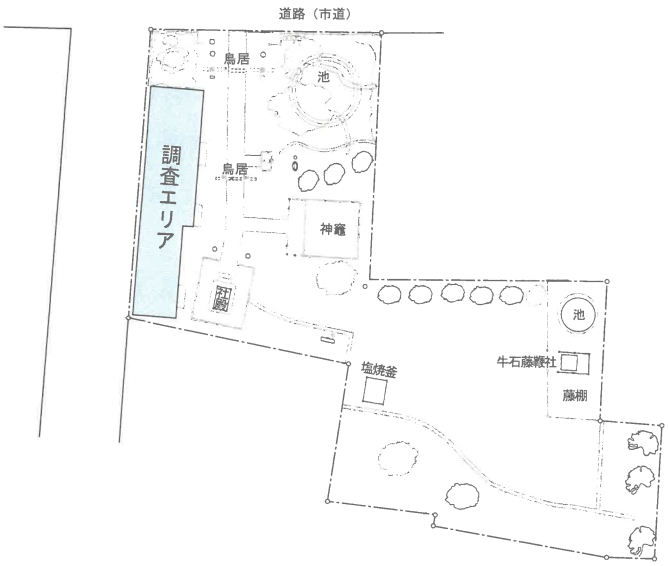
① かつては千賀の浦から西に延びる入江の奥部に近い南側に所在する甫出の浜と言い伝えられている海浜である。また、御釜神社及び鹽竈神社別宮のご祭神である塩土老翁神がその昔に地元の人々に塩づくりを教えた所と伝えられるところでもある。加えて、宮城県指定民俗文化財の鉄釜を用いた製塩法を今に伝える藻塩焼神事が毎年行われている神社でもあることから、製塩に関する遺構・遺物の存在する可能性がある。

② 江戸時代の絵図などから境内には 4 口の神釜、御釜神社の社殿や社務所、仙台藩主の御休所としても利用された鹽竈神社の神官である御釜太夫の社家屋敷なども所在し、それらに関係する遺構の存在や変遷の痕跡なども想定されるところでもある。

③ 御釜神社を含むこの入江一帯は、平安時代末期ないしは鎌倉時代初期頃から海面埋め立てによる集落の形成が始まったと想定されており、江戸時代には現在にもつながる町屋が形成されたところでもあることから、町の形成の実態とその過程についての手がかりが確認される可能性がある。

そこで、高橋守克はこれらのことを明らかにする資料を得ることは塩竈市の歴史の解明や文化財の保護・記録保存のうえからも重要であると考え、鹽竈神社の理解と協力を得て事前の確認調査を実施させていただくのが望ましいのではないかとの助言を行った。

このことを受けて、7 月 30 日に鹽竈神社において郷古正夫生涯学習課長・阿部理美係長、高橋守克が鍵三夫宮司・小野道教権禰宜・茂木裕樹学芸員と会い、事前の確認調査の実施を要請するとともに調査や工事に関する協議を行った。その時点では、建築設計に基づく改築工事はすでに業者に発注がなされ、社務所の解体と更地化も終了し、建築工事にまさに入ろうとしている状況であった。しかも建築工事には、地盤強化のためコンクリートパイルの打ち込みと土壌改良が避けられず、工法の変更も難しいとのことで




第 1 図　御釜神社境内図（東日本大震災前）

あった。それにもかかわらず鹽竈神社には当該確認調査の意義を理解していただき、短期間ではあるが工事を先延ばしにしたうえで、それに先立って調査を実施することについて承諾をいただいた。

8月3日には、現地にて高橋守克と塩竈市教育部生涯学習課の阿部理美係長、大森弘靖主事は小野道教権禰宜及びエム・ケー建築設計事務所・鈴木工務店の担当者と協議を行い、調査開始日や調査範囲等を決定した。調査は8月6日から開始することとし、8月7日からの重機の手配を依頼した。

## 第Ⅱ章　遺跡の環境

### 第1節　遺跡の位置と地理的環境

塩竈市は仙台市の北東に位置し、千賀ノ浦（塩竈湾）を北・西・東側から取り囲む丘陵部と東側の海上にある浦戸諸島からなる。丘陵部は松島丘陵の南端にあたり、かつては千賀ノ浦に向かって徐々に高さを減じながら標高約 10～30m の崖面となって、樹枝状に大小の半島が張り出しており、半島と半島の間は浦(入江)を形成していた。寛政4年(1792)に編纂された『奥鹽地名集』にいう寺ヶ崎・祓ヶ崎などの八崎や鷹巣浦・二又浦などの七浦、杉の入表半島・杉の入裏半島や両半島に囲まれた浦（現新浜地区）がそれに当たる。

今から約2,300万年前の新生代中新世の頃、日本列島では火山活動が活発になり、溶岩や火山砕屑物、火山灰などが広い範囲で堆積した。塩竈や松島湾でも同様の現象が見られた。約170万年前に始まる第四紀になると約 10 万年周期で地球規模の気候変動が繰り返され、幾度もの寒冷な氷河期が訪れた。最終氷河期の約18,000年前の後期旧石器時代には、海水面が現在より約100m低くなっており、松島湾内の島々は陸続きで松島湾全体が丘陵地のようになっていた。約15,000年前になると、急速に地球の温暖化の進行に伴って海水面が上昇し始め、約 11,000 年前の縄文早期は一時的に寒冷化した時期で現海水面より約50m低い位置で停止した。その後、再び温暖化が進み現海水面より約1m高い縄文海進の高頂期を経て、約6,800年前の縄文前期には現海水面とほぼ同じになり、丘陵が海水面下に没し尾根だけが島として残り、現在の松島湾の多島海を形成している。箱庭を思わせる自然的景観と文化的景観が織りなす価値が高く評価され、昭和 27 年(1952)に塩竈市の丘陵部の東端と浦戸諸島を含む松島湾のほぼ全域が国の特別名勝「松島」に指定された。

御釜神社境内遺跡は、塩竈市本町6番1号の文字どおり御釜神社の境内に所在する。JR 仙石線本塩釜駅の約700m西に位置している。当該地をはじめ周辺地域は古代末・中世ころから埋め立てが始まったとされ、現在では市街化しているが、かつては千賀ノ浦が西に向かって鹽竈神社表坂下付近まで入り込み、大きな入江を形成していた。本遺跡の立地はその入江の奥部に近い南側の丘陵が少し緩斜面となる小さな海浜であったと想定される。

御釜神社境内遺跡は塩竈市および宮城県遺跡台帳に未登録であった。この遺跡を含むこの入り江の埋め立てられたエリア一帯は、塩竈の古代から現代まで、とりわけ中世・近世・近代の歴史

を物語る祓川跡・町家跡などをはじめとする文化財的な価値の高い遺構や建築物が残存する貴重なところであり、塩竈に残された数少ない文化的遺産や土木建築遺産等の宝庫ともいえる。

## 第 2 節　遺跡周辺の歴史的環境

現在、塩竈市内で確認され宮城県遺跡台帳に登録されている遺跡は 83 箇所知られているが、その半数以上は東部の浦戸諸島に所在する。丘陵地と海岸埋め立て地からなる市街地地区は、海岸エリアの港湾整備や水産加工団地整備等に伴う丘陵の削平や海面の埋め立て、丘陵エリアの宅地造成等による開発事業に伴い、壊滅した遺跡も多く、わずかにそれに漏れた旧杉の入裏半島の先端部や多賀城市に近い丘陵部に残存する状況である。浦戸地区においても、かつての防潮堤工事にともなって自然の海浜に海水が循環しなくなったり、アマモが生育できなくなったりするばかりか、古代の製塩遺跡の荒廃も進行しつつある現状である。

塩竈市内最古の遺跡と考えられるのは、松島湾の入り口に当たる無人島に所在する船入島貝塚である。貝塚が営まれ始めた縄文時代早期の頃には、この島は前述したように当時は海水面が低く陸続きであった。昭和初期に学術調査がなされ、最下層から縄文早期の土器（船入島下層式）、ハマグリやカキを主体とする貝層からは縄文前期の土器、その上層からは縄文中期の土器などが発見されている。縄文時代前期の代表的な遺跡としては桂島貝塚があげられる。台地中央部を環状に取り囲むように貝層が認められる。塩竈市史編纂や旧浦戸第二小学校建設、震災復興公営住宅建設などに伴って発掘調査が行われた。縄文前期と中期、後期初頭の土器等が出土しており、前期の土器には桂島式が提唱されている。縄文晩期の遺跡には一本松貝塚（壊滅）などがあげられる。また、鹽竈神社表坂近くの塩竈神社境内遺跡や新浜 B 遺跡（壊滅）などからは縄文晩期の製塩土器が発見されており、当地での土器製塩の始まりと考えられている。

弥生時代の遺跡には崎山囲洞窟遺跡（壊滅）、新浜 B 遺跡（壊滅）、東三百浦貝塚などがある。崎山囲洞窟遺跡は昭和 27 年(1952)に調査され、縄文晩期から弥生時代中期にかけての遺物が確認された。弥生時代中期の土器は崎山囲式と呼称されている。新浜 B 遺跡では弥生時代の製塩土器も発見されている。

古墳時代の高塚古墳をはじめ集落跡や製塩遺跡は未発見である。築港工事の際に古墳時代前期の土師器甕が発見されており、この土師器と同じ特徴を有する土器は現在も塩釜式と呼ばれ標識となっている。古墳時代後期には横穴墓という在地有力者の墓が造営される。一本松横穴墓群（壊滅）や清水沢横穴墓群（壊滅）があった。いずれも開発に伴う削平と盗掘を受けており完全な状態ではなかったが、発見された蕨手刀や土師器坏・甕などから 7 世紀後半頃には造営されはじめ 9~10 世紀頃まで使用されたものと考えられている。

古代東北経営の拠点であった陸奥国国府多賀城が営まれた奈良・平安時代になると、塩竈市内にも遺跡が増加してくる。国府経営の上でも重要な国府津の存在も想定され、その擬定地の近くには香津の地区名が残り、舟戸と呼ばれた旧地区名も近年まで存在している。弘仁式や延喜式に名を留める鹽竈神社も創建される。集落跡としては野田遺跡や母子沢遺跡などがある。特に多賀城跡に近い同一丘陵上に立地する母子沢遺跡からは、真北方向の掘立柱建物跡や竪穴住居跡の存

在などから国府多賀城の強い影響下にあった遺跡とも想定されている。また、半島部には製塩を営むとともに半農半漁的な集落とも考えられる平安時代の表杉の入貝塚（壊滅）もあり、ここで発見されたロクロ使用の土師器は標識とされ表杉の入式と呼称されている。集落跡以外では、製塩にかかわる遺跡も杉の入半島部や浦戸諸島の小さな海浜でも数多く認められ、ことに平安時代に入ると製塩遺跡の数が爆発的に増加する。調査の行われた新浜Ｂ遺跡（壊滅）では奈良時代の製塩の炉跡が発見されている。また、杉の入裏半島ではこの時期の須恵器の窯跡（杉の入裏窯跡・壊滅）も発見されている。平安時代後期には鉄窯を用いた製塩が始まったとされており、現在でも御釜神社では宮城県指定民俗文化財である藻塩焼神事が毎年行われている。

平安時代末期ないしは鎌倉時代初期頃から海面埋め立てによる集落の形成が始まったと想定されている。平泉藤原氏の滅亡後、源頼朝によって派遣された伊沢家景が留守職として多賀国府を治め、留守氏を名乗るようになる。鎌倉時代から戦国時代にかけての宮城郡の東半分を領有していた留守氏の財産目録とされる「留守分限帳」によれば、塩竈の町には数多くの町屋敷があり、

１．御釜神社　２．法蓮寺跡　３．鹽竈神社境内遺跡　４．駒犬城跡　５．清水沢横穴墓群（壊滅）　６．藤倉館跡
７．崎山囲洞窟遺跡（壊滅）　８．表杉ノ入貝塚（壊滅）　９．新浜Ａ遺跡　10．新浜Ｂ遺跡　11．杉の入裏窯跡
12．裏杉ノ入遺跡　13．杉の入裏Ａ貝塚　14．杉の入裏Ｂ貝塚　15．越ノ浦Ｂ貝塚　16．越ノ浦Ａ貝塚
17．杉の入裏Ｇ貝塚　18．杉の入裏Ｃ貝塚　19．杉の入裏Ｄ貝塚　20．杉の入裏Ｅ貝塚　21．杉の入裏Ｆ貝塚

**第２図　御釜神社の位置と周辺の遺跡**

留守氏直属の家臣の筆頭である佐藤玄番頭が塩竈を所領とし、12 軒の町屋敷や 3 つの蔵、藤倉に製塩用の釜などを所有し、駒犬城（現東園寺墓所）に居館していたと考えられる。新町ができ、鹽竈神社左宮一禰宜の安大夫などが住んでいた。また、製塩用の釜の所有者として鹽竈神社右宮一禰宜とされる新大夫（吉津）と同じ一族と考えられる小野主殿助（越ノ浦）が記載されている。また、鈴木隼人は御釜の神領を所有していることから御釜神社の御釜守と考えられている。

その後、江戸時代になると塩竈は伊達氏の支配となり、現在にもつながる町屋も形成され、港湾都市・観光都市・鹽竈神社の門前町として発展する基礎ができあがったと考えられている。なお、江戸時代の鹽竈神社神籍として御釜太夫・御釜守鈴木筑前、社人として釜太夫隼人（寛永 21 年：1644）、御釜守鈴木太郎兵衛（宝永元年：1704）の名がみえる。

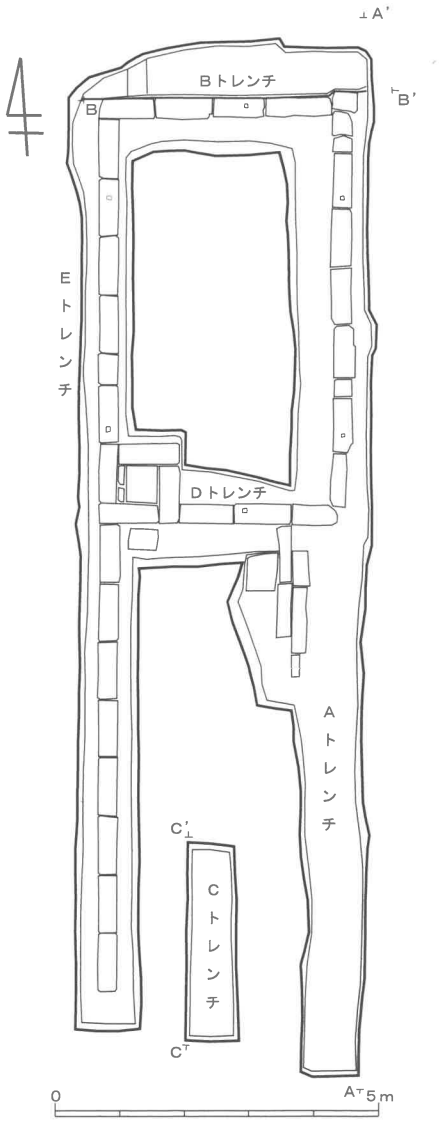
## 第Ⅲ章　調査の方法と経過

8 月 6 日に旧御釜神社社務所跡地に調査区の設定を行った。御釜神社境内の西辺から約 4m 離れた所に幅約 1m・長さ約 16m の南北トレンチ（A トレンチ）と北辺に近い所に幅約 1m・長さ約 4m の東西トレンチ（B トレンチ）である。

8 月 7 日から重機を使用して表土を除去しながら本格的な調査に入った。A トレンチにおいて現地表面を約 30cm 掘り下げたところ、調査区の北側から南北に延びる建物の基礎として用いられた凝灰岩の切石列（東辺）を検出した。同様に B トレンチにおいても凝灰岩の切石列（北辺）を検出したことから、方形の建物プランが想定されたので、調査区を拡張（D・E トレンチ）して、E トレンチにおいて西辺の石列を確認した。

8 月 8 日、前日に建物跡南辺が想定された所に設定しておいた D トレンチを調査し、南辺の石列を検出した。西辺と南辺の交点に当たる建物西南隅の石の配置から建物の出入口ではないかと考え、調査区を一部拡張した結果、改めて凝灰岩切石で囲まれた出入口を確認した。また、A トレンチの北端に近くに設定しておいた A トレンチと平行な幅約 1m・長さ約 3m の南北トレンチ（C トレンチ）を掘り下げ、A トレンチから C トレンチへの層位の変化を確認した。

8 月 9 日、調査に係る平面図や断面図の作成と写真撮影等を行うとともに、西辺で確認された凝灰岩切石の列がさらに南へ延びているように思われたので、E トレンチを南側に拡張した。




第３図　調査区平面図

８月１０日、Ｅトレンチの南側には建物の出入口から凝灰岩の切石が一列に約 7.2m 延びていることを確認した。塀跡の石列ではないかと想定された。この平面図と写真撮影を行い、調査を終了した。その後、埋め戻し作業が開始された。

## 第Ⅳ章　基本層序

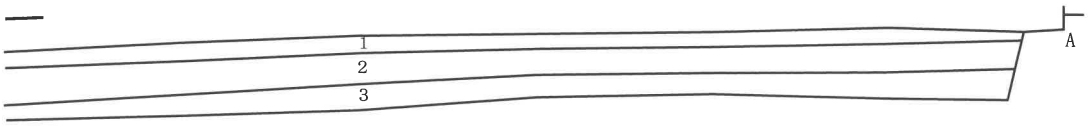
基本層位はＡ・Ｂトレンチにおいて５層（第１層～第５層）に分けられ、第５層上面まで確認した。Ｃトレンチではさらに深く掘り進め、第８層上面まで確認した。Ａトレンチにおいては、第１層を重機によって取り除いた。

**【第１層】**　表土層で、黒褐色（10YR2/3）のシルトである。厚さ約 10 ㎝で調査区全域を覆っており、東日本大震災の津波によって運ばれた土と考えられる。加えて旧社務所解体の整地に伴って動かされたこともあってしまりが少なく、ビニル・ガラス瓶・陶磁器片などが混入している。また、東日本大震災後の片付けのために表土面から２層を貫いて部分的に第３層の途中まで至るように掘り込まれた穴が数ヵ所あり、そこからビニル・ガラス片などがまとめて廃棄されたような状態で発見され、若干ではあるが近世のものかと思われる瓦片も出土した。遺物は５層・６層（攪乱層）として取り上げた。

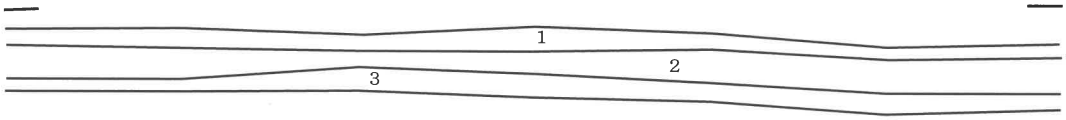
**【第２層】**　黒褐色（10YR2/2）のシルトで、Ａトレンチでみると、南側が約 20 ㎝と厚く、北側は約 10 ㎝と薄く堆積している。Ｂトレンチでは旧社務所解体に伴う整地により上部は削平されており、約５㎝の厚さである。Ｃトレンチでは第１層自体が薄かったため、震災後の整地により第１層と第２層がミックスしてしまい、しまりのない第１層だけで本来の第２層はない。

**【第３層】**　にぶい黄褐色（10YR5/4）のシルトで、明褐色（7.5YR5/6）シルトの粒子を含んでおり、調査区全域を覆っている。Ａトレンチでは厚さ約 10 ㎝、隣のＣトレンチでは厚さが約 20～30 ㎝、調査区北端のＢトレンチでは厚さ約 10 ㎝である。これらのことから、この層は調査区北西部ほど厚く堆積していることが想定され、明治時代初期に存在した池跡の一部に堆積したためとも考えられる。凝灰岩切石による建物遺構や塀跡遺構の上面はこの層を掘り下げている過程で検出された。建物跡内の堆積土については、凝灰岩の切石に沿って東辺で幅約 50 ㎝、西辺で幅約 10 ㎝、南辺で幅約 50 ㎝、北辺で幅約 40 ㎝の範囲を第４層上面まで掘り下げた。さらにその内側の中央部については、時間的な制約もあり掘り下げることを断念した。塀瓦を中心とする瓦類は、その大部分が建物内の掘り下げた範囲で第４層上面に近いこの層からも出土している。遺物は建物内１層として取り上げた。

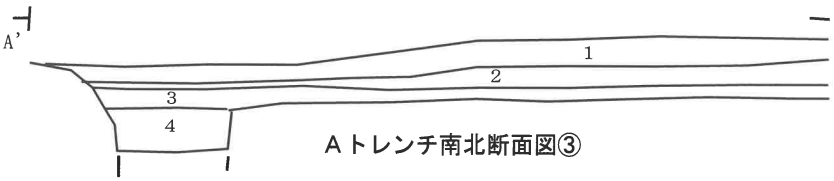
**【第４層】**　明褐色（7.5YR5/6）のクレイで、この海浜周辺では存在の確認できない人為的な堆積の粘土層である。Ａ・Ｂ・Ｃトレンチでも確認されている。凝灰岩の切石自体もこの粘土層に据えられ、凝灰岩切石によって区画される建物跡内の調査範囲にも厚さ 40～45 ㎝で充填されている。また、凝灰岩切石の外側では、上面が内側より約８㎝低いが、ほぼ水平になるようにこの粘土層で整地されている。この層の建物跡内外での検出範囲は前述の通りであるが、この層が切石を据えるためだけの範囲に存在するのか、建物内の全域に及ぶのかなどについては、不明である。



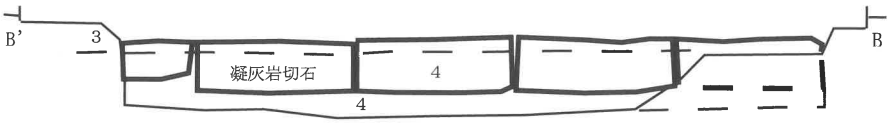

Ａトレンチ南北断面図①



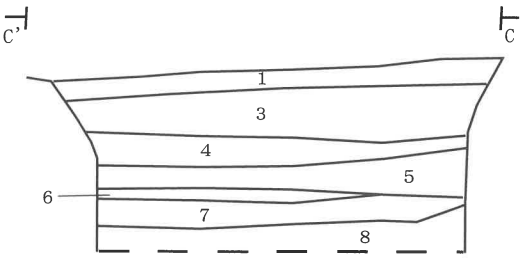

Ａトレンチ南北断面図②



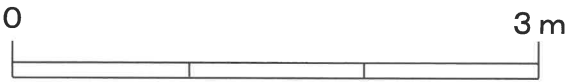

Ａトレンチ南北断面図③




Ｂトレンチ東西断面図




Ｃトレンチ南北断面図




| No. | 基本層位 | 土　　色 | 土性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 第１層 | 黒色（10YR2/3） | シルト | 東日本大震災津波で運ばれた土 |
| 2 | 第２層 | 黒色（10YR2/2） | シルト | Ｃトレンチでは第１層とミックス |
| 3 | 第３層 | にぶい黄褐色（10YR5/4） | シルト | 明褐色（7.5YR5/6）シルト粒子を含む |
| 4 | 第４層 | 明褐色（7.5YR5/6） | クレイ | 人為的な堆積土（整地層） |
| 5 | 第５層 | 黒色（10YR2/1） | シルト | 上面より洋釘などが出土 |
| 6 | 第６層 | オリーブ褐色（2.5YR4/6） | クレイ | 池の造成時の底面（整地層）？ |
| 7 | 第７層 | オリーブ黒色（5GY2/1） | シルト | |
| 8 | 第８層 | 黒色（10Y2/1） | シルト | |

第４図　Ａ・Ｂ・Ｃトレンチ断面図

塀瓦を主体とする瓦類は、第４層上面から出土したものが多く、第４層に瓦の一部がめり込んだような状態で出土したものもあった。遺物は建物整地層上面として取り上げた。なお、塀跡は時間的制約等から凝灰岩切石の上面までしか掘り下げていないため、第４層の整地層の存在等については確認することはできなかった。

**【第５層】**　黒色（10YR2/1）のシルトであるが、ヘドロのような感じのする層である。A トレンチの北端部と B トレンチではこの層の上面まで掘り下げた。A・B・C トレンチとも地表面より約 55 ㎝の深さで上面に到達する。また、建物内北東隅において地層観察のため約 50 ㎝四方を深掘りしたところ、この層の上面から洋釘と板状の材木片およびアサリ・シジミの貝殻片が出土した。C トレンチではさらに深く掘り進めたところ、第５層の厚さは 20 ㎝前後である。

**【第６～第８層】**　C トレンチでの第６層は厚さ 5～10 ㎝のオリーブ褐色（2.5YR4/6）のクレイで、人為的な層と考えられる。このトレンチはかつて絵図にも記載された池が存在した所の東端にあたるのではないかと推測され、A トレンチと比較すると第３層以下の同じ層であっても西に向かって傾斜しており、より深い位置に存在する。したがって、この第６層は池を造る際に、底面の整地に用いられたのではないかと思われる。第７層はオリーブ黒色（5GY2/1）のシルトで、第８層は黒色（10Y2/1）のシルトである。第７層・第８層ともにヘドロではないかと思われるような層である。

## 第Ⅴ章　発見した遺構と遺物

本調査で発見した遺構には、建物跡１棟と塀跡１列がある。遺物には、塀瓦片、丸瓦片、陶磁器片、鉄製洋釘、板材木片、貝殻片などがある。

### 第１節　発見した遺構

#### （１）　建物跡（第６図）

建物跡は神社参道入り口に近い境内の北西隅に当たる調査区の北端で検出された。江戸時代の宝暦５年(1755)以前の修復帳（東北大学蔵）の絵図に描かれた社家の一つである御釜大夫の自宅の所在位置と向きは異なるがおおむね符合するところでもある。建物跡の西側はすぐに神社の敷地外で、南北に延びる暗渠の堀を挟んで通称白坂と呼ばれる

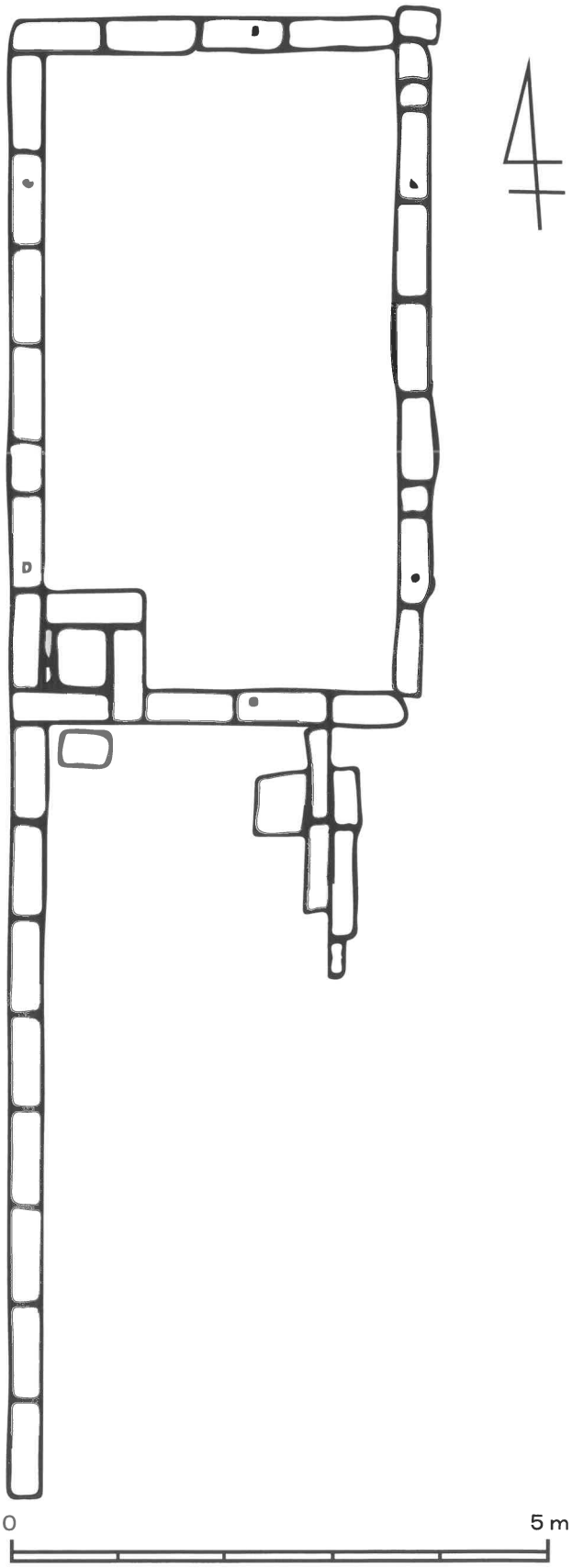
**第５図　御釜社の社家と荷堀（奥州名所図会・神竈社）**

市道となっており、これらと建物跡西辺はほぼ平行になっている。堀は文政年間(1818-30)に描かれた「奥州名所図会」の「神竈社」(宮城県図書館蔵)の絵画に描かれている荷堀と思われる。

建物跡は第4層の明褐色粘土の盛土の上に、凝灰岩の切石で南北に長い長方形に区画しており、土台石を兼ねた地覆石ではないかと思われる。その内側には掘り下げた範囲では同じ粘土が充填されており、外側にも範囲は不明であるが同じ粘土が内側よりは低く敷かれている。

切石は、基本的に長さ 90 ㎝、幅 30 ㎝、厚さ 30 の直方体を使用し、長さの短い切石を一部に用いて平行する辺の長さが一致するように調整している。建物の規模は、芯々で梁行 3.5 間(630cm)×桁行 2 間(360cm)で、南北に長い建物である。すべての切石上面の外縁は、幅 3 ㎝で斜めの面取りが施されている。長辺である東側の切石列と西側の切石列には、対象の位置に約 6 ㎝(2 寸)四方で深さ約 6 ㎝のほぞ穴が 2 か所ずつ認められる。東側および西側のほぞ穴の間隔は、芯々で 360 ㎝(2 間)である。これは間仕切り用の柱を立てたものと思われ、北側が 2 間×2 間の間、南側が 1.5 間×2 間の間であったと思われる。短辺である北側の切石列と南側の切石列にも、長辺と同じ大きさのほぞ穴が対象の位置に 1 か所ずつ認められる。ほぞ穴は北側と南側の切石列とも東側の中心までの距離が約 210 ㎝(7 尺)、西側の中心までの距離が約 150 ㎝(5 尺)である。この 2 つも柱を立てたものと思われる。

建物跡の南西隅では、凝灰岩の切石が芯々で 90 ㎝(3 尺)四方に配置されている。




第6図　建物跡・塀跡平面図

その内側に 57 ㎝（1 尺 9 寸）×48 ㎝（1 尺 6 寸）の井内石が東側に寄せて置かれている。この石の上面には、石を割るときに打ち込まれた楔の跡と考えられる溝が残されている。この石と西側の凝灰岩切石との間隙には、井内石の自然石が 2 個配されている。これらの事から、この南西隅は建物への出入口（玄関）と考えられる。また、出入口の前（南側）にも、48 ㎝（1 尺 6 寸）×33 ㎝（1 尺 1 寸）の井内石が置かれている。

建物跡の南東隅のすぐ外側には、4 個の凝灰岩の切石が南側に 2 列に並ぶように配されている。建物跡南辺の切石でみると、外側の切石列の位置がほぞ穴の部分から東側の位置の範囲の幅と一致していることなどから、建物の受付窓口があった場所ではないかとも思われる。

なお、建物跡の北西隅において地層観察等のために第 4 層の整地層を約 50 ㎝四方にわたり深掘りした。第 5 層上面に到達したところで鉄製の洋釘、薄い木製の板材片、貝殻片が近い場所から出土した。これらの遺物は単に以前の建物の解体にともなって落下してそのまま放置されたものなのか、これらの遺物の出土した場所は建物の鬼門の位置に当たることから、建築工事の安全と建物の完成を祈願した地鎮祭のような祭祀的な痕跡を示すものではないかとも推測されるが、明らかではない。

**（2）塀　跡（第 6 図）**

塀跡の基礎には、建物跡と同じ長さ 90 ㎝×幅 30 ㎝×厚さ 30 ㎝の直方体の凝灰岩の切石が使用されている。建物跡の西辺をそのまま南に一直線に延長したかたちで、切石が 8 個確認された。確認された塀の長さは 720 ㎝（4 間）であるが、その南側では過去に取り除かれていたのか検出されなかった。塀跡の切石列の上面の高さと建物跡の切石の上面の高さは一致するように設置されていることからも、建物跡と一体の計画の下で建築されたものと考えられ、これらは境内西辺の一部ともなっている。

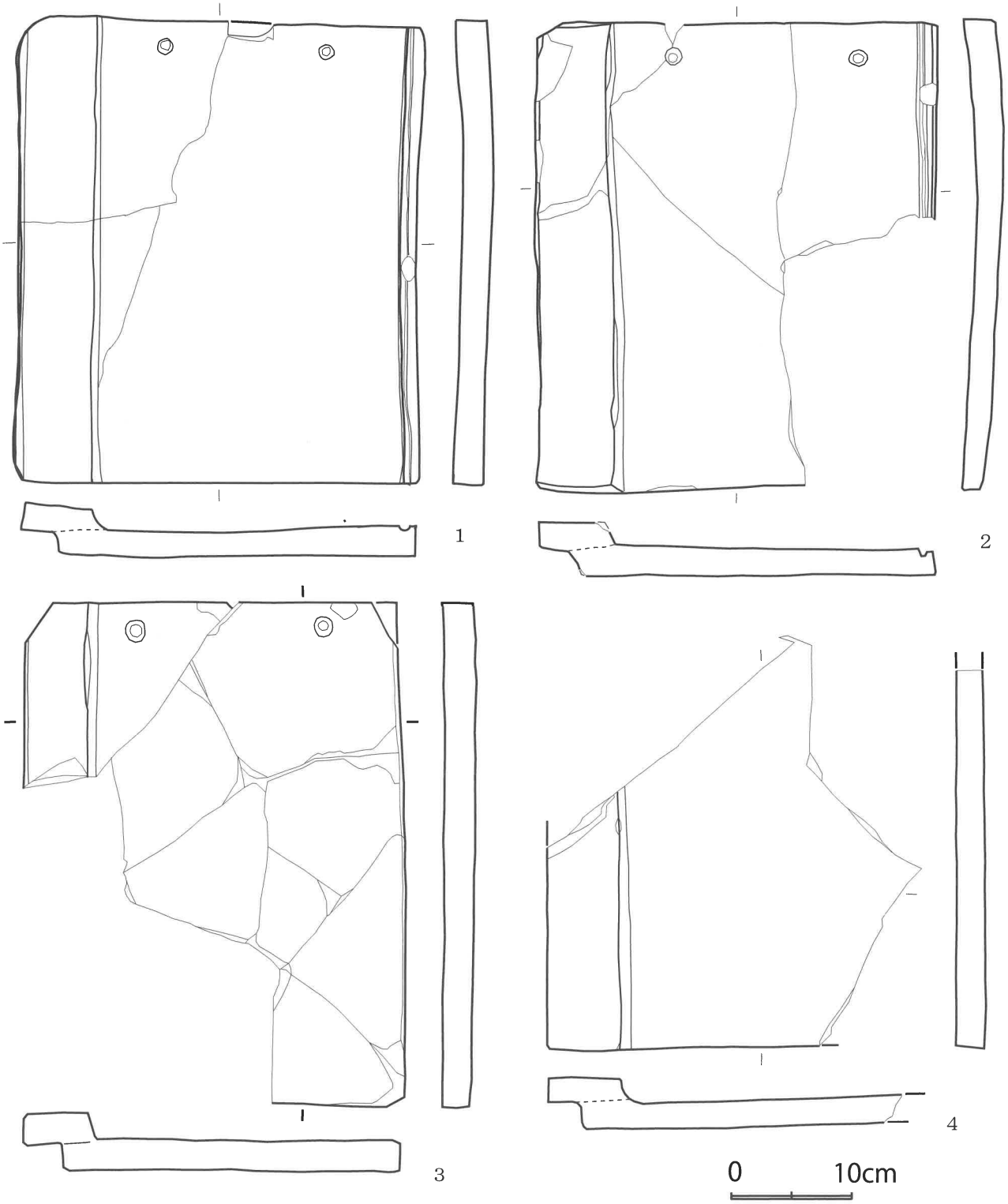
## 第 2 節　発見した遺物

**（1）塀　瓦**（第 7 図 1～第 11 図 22）

塀瓦のほとんどは建物内の整地層（第 4 層）上面およびその面に近い第 3 層から出土したが、一部は震災処理と考えられる攪乱層から出土したのも含めると合計で 33 点出土している。そのうち図化できたのは 22 点である。厚さの異なる 11 と 17 を除く塀瓦のうち、全体の法量が分かる資料において計測すると、長さ 38.5～42.5 ㎝、幅 29.5～34.0 ㎝であり、左側に幅約 6 ㎝、厚さ約 2 ㎝の桟を有している。色調は黄灰色、焼成は堅緻である。胎土には石英・長石・黒色粒が多く含まれている。これらの塀瓦は(2)で述べる 2 点の丸瓦とともに建物跡・塀跡の建築に当たり、建物内に置かれたものと思われる。

1 は尻（上部)中央が一部欠損するが、ほぼ完形である。桟の頭と尻の隅は斜めに切られているが、尻の部分の切込みが大きい。左端には幅約 6 ㎝、厚さ約 2 ㎝の桟を有している。右側縁近く(差込み)には V に近い U 字形の水切り溝があり、尻の近くには径約 12 ㎜の釘穴が 2 個ある。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる

2 は右側下部を欠いている。尻の左隅は斜めに切られている。左端に幅約 6 ㎝、厚さ約 2 ㎝の




| No. | 層位・遺構 | 名称 | 法量（mm） | | | | 釘孔 | 水切り溝 | 調整 | | 備考 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 桟幅 | | | 凸面 | 凹面 | 色調 | 焼成 | 胎土 |
| 1 | 建物内整地層上面・Ａ３層 | 塀瓦 | 390 | 340 | 厚 26<br>薄 20 | 上面 60<br>基部 68 | 有<br>２孔 | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 2 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | 395 | 335 | 厚 25<br>薄 21 | 上面 61<br>基部 70 | 有<br>２孔 | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 3 | 建物内整地層上面 | 塀瓦 | 425 | 315 | 厚 26<br>薄 23 | 上面 50<br>基部 70 | 有<br>２孔 | 無 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 普通 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 4 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | (349) | (312) | 厚 25<br>薄 22 | 上面 60<br>基部 70 | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |

**第７図　塀瓦実測図１**

桟を有し、桟の側面は面取りされている。右端近く(差込み)にはVに近いU字形の水切り溝があり、尻近くには径約12㎜の釘穴が2個ある。また、尻から約7㎝の範囲は、徐々に厚みを減少させている。表面はヘラケズリののち丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

3は左側下部を欠いている。尻の左隅は斜めに切られているが、他の隅の形状は欠損や摩滅のため不明である。左端に幅約5㎝、厚さ約2㎝の桟を有し、桟の側面は面取りされている。水切り溝はないが、尻の近くには径約15㎜の釘穴が2個ある。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

4は尻部および右側部を欠いている。残存する頭の左隅では少し丸みをもつ。左端に幅約6㎝、厚さ約2㎝の桟を有する。釘穴や水切り溝については不明である。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

5は下半部と右側部を欠いている。左端に幅約6㎝、厚さ約2㎝の桟を有する。尻の近くには径約13㎜の釘穴が1個残存しているが、本来は2個存在したものと思われる。水切り溝については不明である。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

6は桟の上半部は残存しているが、頭や尻、差込みの部分を欠いている。左端に幅約6㎝、厚さ約2㎝の桟を有する。釘穴や水切り溝については不明である。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

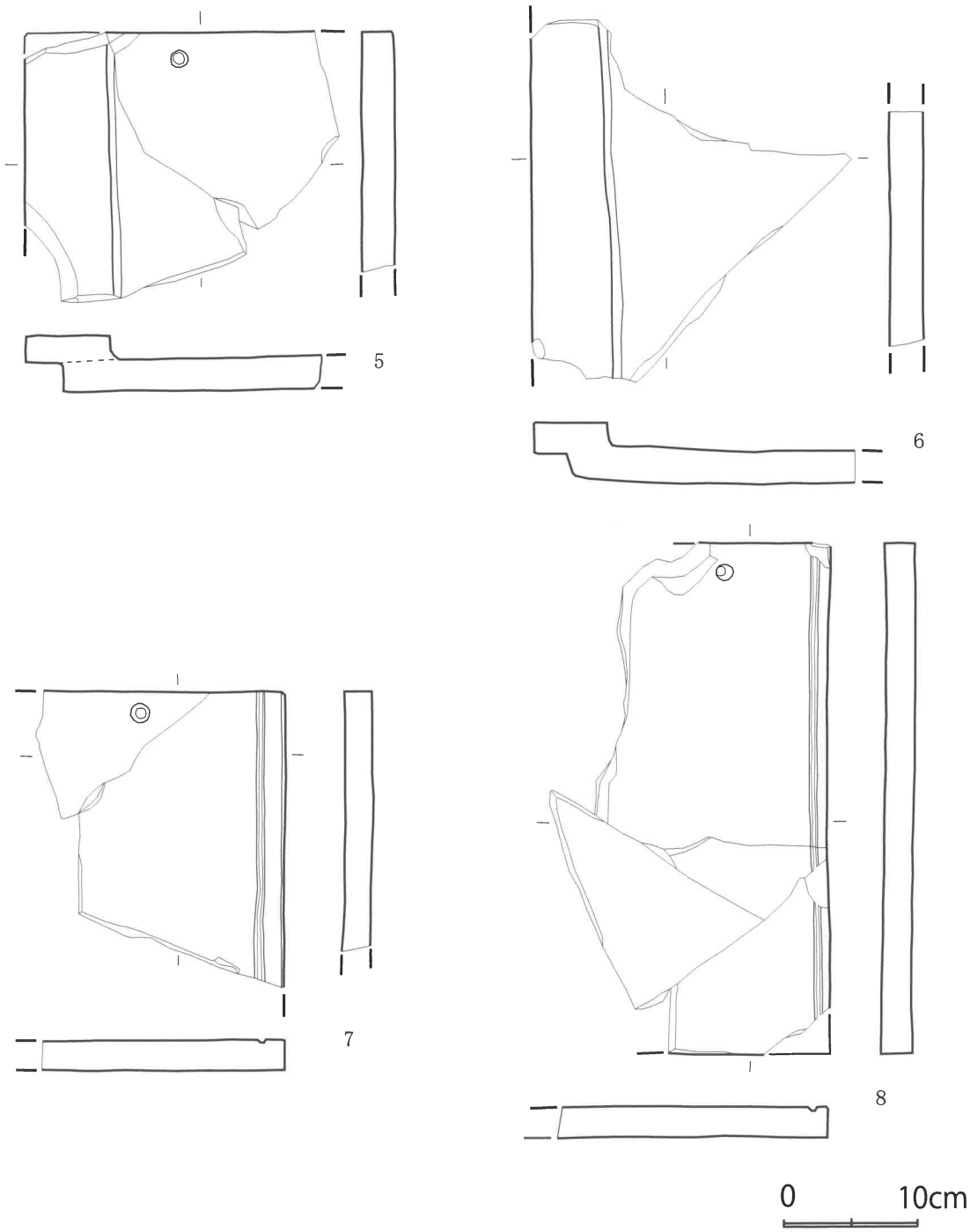
7は左側の桟の部分と下半部を欠いている。尻の近くには径約14㎜の釘穴が1個残存しているが、穴の位置からみるともともと1個ではないかとも思われる。Vに近いU字形の水切り溝が瓦の右側縁(差込み)から約1.5㎝離れた位置を平行に走っている。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

8は左側の桟の部分を含む左側部を欠いている。尻の近くには径約12㎜の釘穴が1個残存しているが、本来は2個存在したものと思われる。右側縁近く(差込み)にはVに近いU字形の水切り溝が平行に走っている。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

9は左側の桟の部分を含む左側部と頭と尻に当たる右側の上・下端部を欠いている。尻の近くには径約13㎜の釘穴が1個残存しているが、本来は2個存在したものと思われる。Vに近いU字形の水切り溝が瓦の右側縁（差込み）から約1.5㎝離れた位置を平行に走っている。表面にはヘラ状工具によるケズリののちに丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

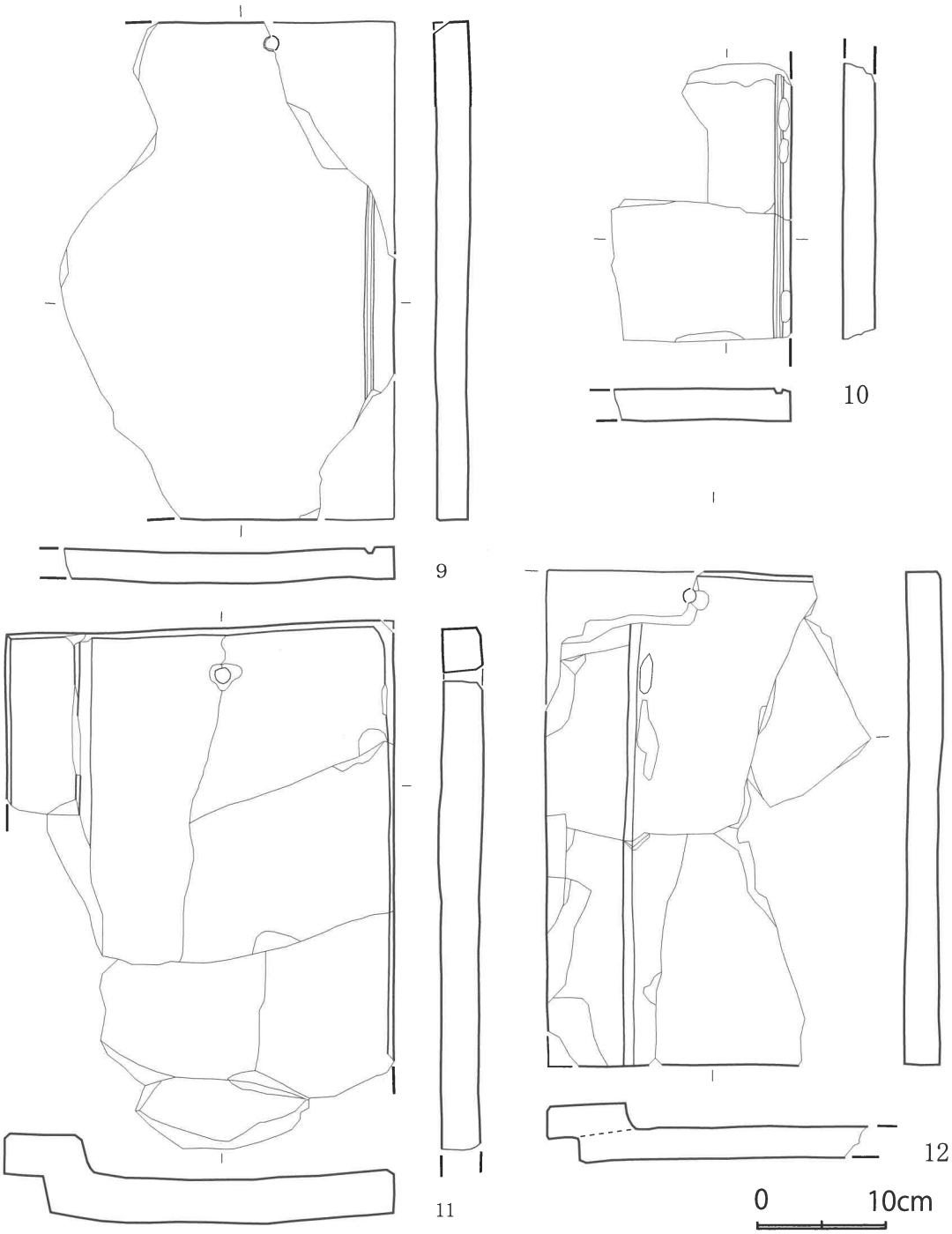
10は左側の桟の部分を含む左側部と頭と尻に当たる右側の上・下部を欠いている。右側縁近く(差込み)にはVに近いU字形の水切り溝が平行に走っているが、釘穴については不明である。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

11は左側の桟の下部と頭に当たる下端部を欠いている。瓦全体が厚さ30㎜程度あり、他の瓦の厚さ約20㎜に比して厚みがある。裏面のほぼ全体に緑色に近い自然釉が認められる。桟を含




| No. | 層位・遺構 | 名称 | 法量（mm） | | | | 釘孔 | 水切り溝 | 調整 | | 備考 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 桟幅 | | | 凸面 | 凹面 | 色調 | 焼成 | 胎土 |
| 5 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | (200) | (233) | 厚 25<br>薄 24 | 上面 63<br>基部 68 | 有<br>（２孔） | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒（多） |
| 6 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | (270) | (239) | 厚 25<br>薄 22 | 上面 60<br>基部 70 | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒（多） |
| 7 | 建物内整地層<br>上面・Ａ攪乱 | 塀瓦 | (225) | (185) | 厚 22<br>薄 20 | | 有<br>（２孔） | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒（多） |
| 8 | 建物内攪乱<br>Ａトレ攪乱 | 塀瓦 | 385 | (208) | 厚 23<br>薄 22 | | 有<br>（２孔） | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒（多） |

第８図　塀瓦実測図２




| No. | 層位・遺構 | 名称 | 法量（mm） | | | | 釘孔 | 水切り溝 | 調整 | | 備考 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 桟幅 | | | 凸面 | 凹面 | 色調 | 焼成 | 胎土 |
| 9 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | 390 | (262) | 厚 25<br>薄 23 | | 有<br>(２孔) | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 10 | Ａトレ攪乱 | 塀瓦 | (218) | (140) | 厚 25<br>薄 24 | | | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 11 | 建物内整地層上面・Ａ３層 | 塀瓦 | (407) | 305 | 厚 35<br>薄 30 | 上面 55<br>基部 67 | 有<br>１孔 | 無 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 普通 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 12 | 建物内整地層上面 | 塀瓦 | 388 | (253) | 厚 27<br>薄 25 | 上面 62<br>基部 70 | 有<br>(２孔) | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 普通 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |

**第９図　塀瓦実測図３**

む側縁部は丁寧に面取りされている。桟は上面の幅約 6 ㎝、厚さ約 3 ㎝で、内側の側面も丁寧に面取りされている。尻の近くには径約 12 ㎜の釘穴が 1 個残存しているが、水切り溝は存在しない。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

12 は右側部と尻部左隅の部分を欠いている。左端に幅約 6 ㎝、厚さ約 2 ㎝の桟を有する。尻の側縁部は丁寧に面取りされている。尻の近くには径約 13 ㎜の釘穴が 1 個残存しているが、本来は 2 個存在したものと思われる。水切り溝については不明である。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

13 は右側部と上半部分を欠いている。左端に幅約 6 ㎝、厚さ約 2 ㎝の桟を有する。釘穴や水切り溝については不明である。頭の側縁部は丁寧に面取りされている。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

14 は右側部と下半部分を欠いている。左端に幅約 6 ㎝、厚さ約 2 ㎝の桟を有する。桟の左上隅は斜めに切られている。桟と重なる部分には、桟を重ねやすくするためと思われる櫛目状の痕跡が認められる。尻の近くには径約 12 ㎜の釘穴が 1 個残存しているが、本来は 2 個存在したものと思われる。水切り溝については不明である。尻の側縁部は丁寧に面取りされている。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

15 は右側部と上部分を欠いている。桟の上部は剥がれてしまっているが、基部の部分はわずかに残存している。桟と重なる部分には、桟を重ねやすくするためと思われる櫛目状の痕跡が認められる。釘穴については不明であるが、わずかに残る右側縁部では約 13 ㎜離れた位置をＶに近い U 字形の水切り溝が平行に走っている。また、その部分の側縁部は丁寧に面取りされている。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

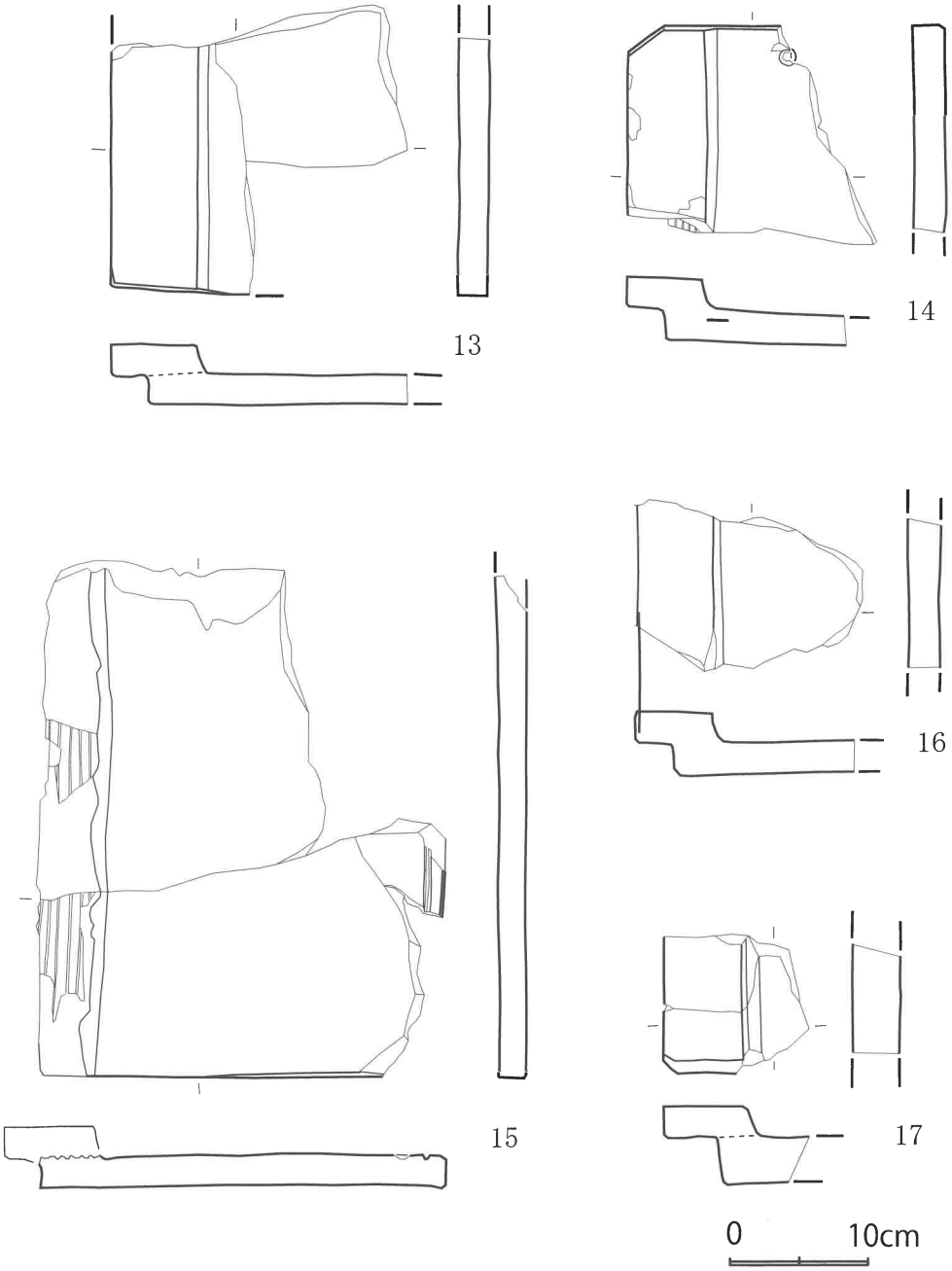
16 は桟を有する左側部の一部が残存している。左端に幅約 5.5 ㎝、厚さ約 2 ㎝の桟を有する。その側縁部は面取りされている。釘穴や水切り溝については不明である。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

17 は桟を有する左側下部が残存している。桟は幅約 6 ㎝、厚さ約 2 ㎝である。その内側縁部は面取りされている。桟の厚さは他の塀瓦と変わらないが、谷の部分は厚さ約 3.5 ㎝あり、他の塀瓦より厚くなっている。塀瓦ではなく別な用途の瓦の可能性もある。釘穴や水切り溝については不明である。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

18 は桟を有する左側下部が残存している。桟は幅約 6 ㎝、厚さ約 2 ㎝である。その外側縁部は面取りされている。釘穴や水切り溝については不明である。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

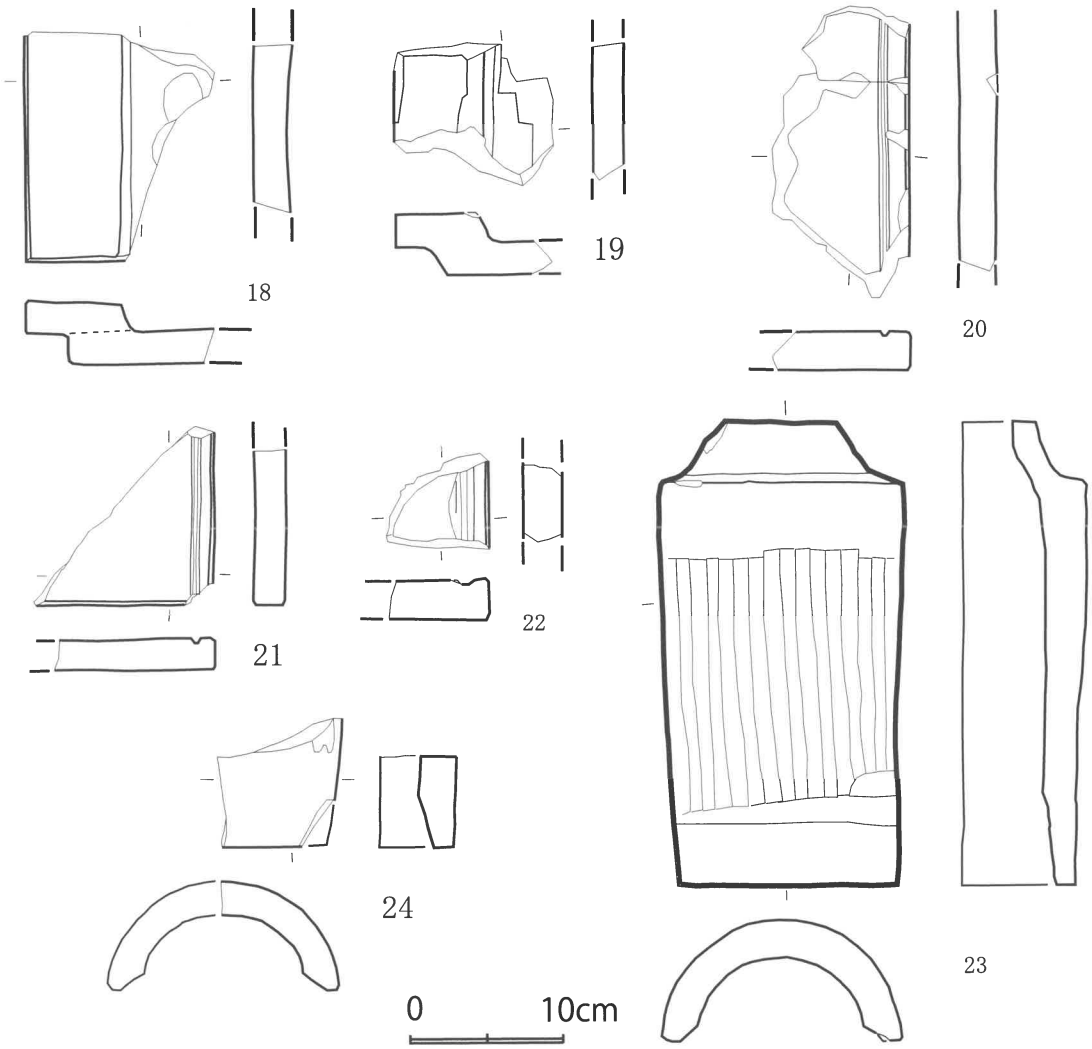
19 は桟を有する左側部の一部が残存している小破片である。破片の大部分は摩滅しており、桟の上面や内側基部付近がわずかに原状を残している。桟は幅約 5.5 ㎝、厚さ約 2 ㎝と思われる。釘穴や水切り溝については不明である。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

20 は右側部の一部が残存している小破片である。破片の谷部分の断面は摩滅している。釘穴は




| No. | 層位・遺構 | 名称 | 法量（mm） | | | | 釘孔 | 水切り溝 | 調整 | | 備考 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 桟幅 | | | 凸面 | 凹面 | 色調 | 焼成 | 胎土 |
| 13 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | (206) | (215) | 厚 22<br>薄 20 | 上面 63<br>基部 71 | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 14 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | (159) | (180) | 厚 24<br>薄 22 | 上面 58<br>基部 65 | 有<br>(２孔) | | 丁寧なナデ | やや粗いなナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 15 | 建物内整地層<br>上面・Ａ３層 | 塀瓦 | (375) | 295 | 厚 23<br>薄 22 | | | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 16 | 建物内攪乱 | 塀瓦 | (124) | (165) | 厚 24<br>薄 22 | 上面 55<br>基部 64 | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 17 | Ａトレ攪乱 | 雁振瓦 | (101) | (105) | 厚 35<br>薄 35 | 上面 60<br>基部 70 | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 普通 | 石英、長石<br>黒色粒(無) |

**第 10 図　塀瓦実測図４**




| No. | 層位・遺構 | 名称 | 法量（mm） | | | | 釘孔 | 水切り溝 | 調整 | | 備考 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 桟幅 | | | 凸面 | 凹面 | 色調 | 焼成 | 胎土 |
| 18 | Aトレ3層 | 塀瓦 | (152) | (124) | 厚 25<br>薄 21 | 上面 61<br>基部 71 | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 19 | Aトレ3層 | 塀瓦 | (95) | (104) | 厚 21<br>薄 20 | 上面 55<br>基部 70 | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 20 | Aトレ3層・攪乱 | 塀瓦 | (193) | (90) | 厚 25<br>薄 24 | | | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 21 | Aトレ3層 | 塀瓦 | (118) | (119) | 厚 21<br>薄 19 | | | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 22 | 建物内攪乱 | 塀瓦 | (63) | (68) | 厚 27<br>薄 25 | | | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |

| No. | 層位・遺構 | 名称 | 法量（mm） | | | | | 釘孔 | 調整 | | 備考 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 玉縁 | 高さ | | 凸面 | 凹面 | 色調 | 焼成 | 胎土 |
| 23 | 建物内整地層 | 丸瓦 | 307 | 160 | 厚 27<br>薄 21 | 長さ 35<br>幅 (74) | 尻 82<br>頭 54 | 無 | ケズリ→ナデ | 布目ナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |
| 24 | Aトレ3層 | 丸瓦 | (85) | (82) | 厚 24<br>薄 21 | | 頭 (50) | | ケズリ→ナデ | 布目ナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石<br>黒色粒(多) |

**第 11 図　塀瓦・丸瓦実測図**

不明であるが、V に近い U 字形の水切り溝は右側縁から約 1.5cm 離れた位置に平行に造られている。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

21 は右側部の下部が残存している小破片である。釘穴は不明であるが、V に近い U 字形の水切り溝は右側縁に近い位置に平行に造られている。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

22 は右側部の一部が残存している小破片である。釘穴は不明であるが、V に近い U 字形の水切り溝は右側縁に近い位置に平行に造られている。表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が見られる。

23～33 はすべて小破片である（第 1 表参照）。うち 1 点には右縁辺近くに V に近い U 字形の水切り溝がある。調整は表面には丁寧なナデ調整、裏面にはヘラ状工具によるケズリ、ナデ調整が認められる。

**（2）丸　瓦**（第 11 図 23～24）

2 点出土している。

1 は第 4 層の整地層に埋め込まれたような状況で出土した。玉縁などの一部に欠損部分はあるが、ほぼ完形である。凸面では玉縁全体から尻部にかけてと頭部に丁寧なヨコナデ調整、背の中央部分では縦位のヘラ成型ののちヨコナデ調整、左右の側縁に近い部分にはヨコナデ調整が認められる。凹面では玉縁の先端付近と頭部に丁寧なヨコナデ調整、中央部分には縄状の圧痕が認められる。

2 は第 4 層の上面に近い第 3 層から出土した。頭部右側の破片である。凸面・凹面ともヘラ成形ののちナデ調整が施されている。

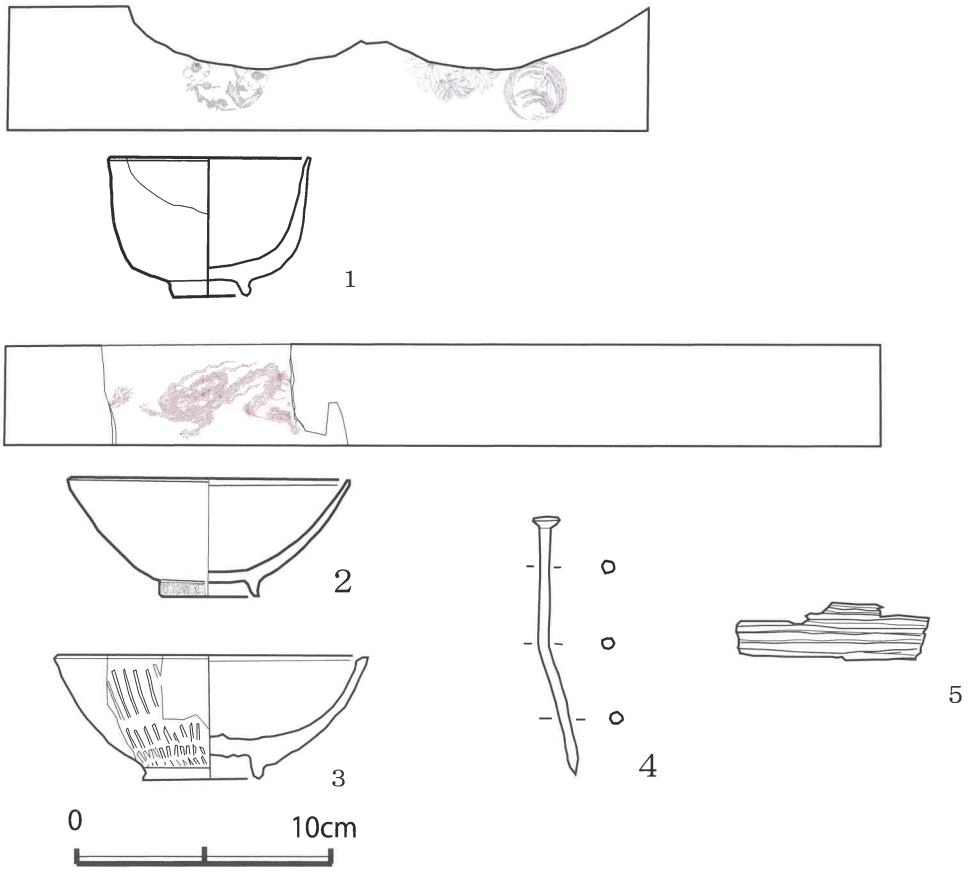
**（3）陶磁器**（第 12 図 1～3）

第 1 層から東日本大震災の津波によって運ばれてきたと思われる陶器の擂鉢片などの小破片が比較的多く出土している。そのうちの 3 点の磁器を図化した。

1 は白磁の碗である。口縁部の約 5 分の 1 を欠く。体部には呉須により円形になるように梅・菊・水仙の染付が描かれている。底部と高台の境には 3 条の線が巡る。底部外面には「翠山」と書かれている。

2 は白磁の高台付碗で、口縁部から高台まで約 4 分の 1 残存する。口縁部の外面には呉須による 1 条の線、内面には 2 条の線が巡る。体部には龍の染付が描かれている。本来は 2 つの龍が配されていたのではないかと思われる。底部と高台の境には 2 条の線が巡り、高台には小さなアーチ形の絵柄が描かれている。底部外面には「□の中に文字か記号らしきものが書かれている」が解読できなかった。

3 は内面が青磁の碗である。口縁部がわずかに残り、体部下部から底部・高台のほぼ 2 分の 1 が残る破片である。体部外面は焦げ茶色の釉を基本とし一部に灰白色の釉が見られる。また、体部外面には櫛目状の筋が 5 段にわたって施されている。高台の外面は焦げ茶色の釉、内面は焦げ茶色の釉を基本とし中央部に灰白色の釉が見られる。




第 12 図　陶磁器・洋釘・板材片実測図

| No. | 層位・遺構 | 名称 | 法量（mm） | | | | 釘孔 | 水切り溝 | 調整 | | 備考 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 桟幅 | | | 凸面 | 凹面 | 色調 | 焼成 | 胎土 |
| 23 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | (110) | (130) | 厚 24 | | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 24 | 建物内攪乱 | 塀瓦 | (95) | (130) | 厚 24 | | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 25 | 建物内攪乱 | 塀瓦 | (96) | (88) | 厚 24 | | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 26 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | (100) | (60) | 厚 24 | 、 | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 27 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | (69) | (68) | 厚 24 | | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 28 | Ａトレ攪乱 | 塀瓦 | (195) | (85) | 厚 24 | | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 29 | Ａトレ攪乱 | 塀瓦 | (70) | (104) | 厚 24 | | | 有 | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 30 | Ａトレ攪乱 | 塀瓦 | (67) | (74) | 厚 24 | | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 31 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | (103) | (105) | 厚 24 | 、 | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 32 | Ａトレ３層 | 塀瓦 | (71) | (104) | 厚 24 | | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |
| 33 | Ａトレ攪乱 | 塀瓦 | (62) | (41) | 厚 24 | | | | 丁寧なナデ | やや粗いナデ | 黄灰色 | 堅緻 | 石英、長石黒色粒(多) |

第１表　塀 瓦 破 片 観 察 表

（4）洋　釘（第12図4）

洋釘・板材片・貝殻片は、建物跡北東隅の深掘りした箇所の第5層上面から出土した。

鉄製の洋釘は全長が10.4cmで、釘のほぼ中央でくの字形に屈曲している。頭は平坦な円形で径が10mm、釘の断面は円形で径が4mmである。一般にいう4寸釘に相当するものと考えられる。

（5）板材片（第12図5）

木製の板材片である。樹木の特定はできなかったが、杉材のような縦の木目が明瞭に認められる。残存する長さは7.5cm、最大幅2.2cm、厚さ3mmである。

（6）貝　殻（図版7）

アサリ片2点、シジミ片2点の4点が出土した。いずれも小破片である。

## 第3節　考　察

### （1）瓦の検討

桟瓦は従来の平瓦と丸瓦を一枚に組み合わせたもので、近江国三井寺の瓦師である西村半兵衛によって延宝2年(1674)に発明されたとされている。ここでいう塀瓦も、方形の平坦な板状の平瓦に板状の桟を組み合わせたものである。板塀瓦と称されることもある（坪井利弘1977）。

御釜神社境内遺跡から出土した塀瓦の特徴を要約すると、以下のとおりである。厚さなどの異なる11と17を除く塀瓦のうち、全体が分かる資料で計測すると、法量は長さ38.5～42.5cm、幅29.5～34.0cmであり、左側に幅約6cm、厚さ約2cmの桟を有している。色調は黄灰色、焼成は堅緻であり、胎土には石英・長石・黒色粒が多く含んでいる。桟は本体と同じ長さで、尻側の厚みを削いでその隅を斜めに切るものと切らないものとがある。桟全体が残存していない資料もあるため断定はできないが、桟が本体より短く作られるものは発見されていない。桟の取り付けに当たっては、本体の側辺に櫛状の工具で平行線のキズを付けて付着させている。桟の反対側の側辺に沿ってVに近いU字状の水切り溝が切られているものもある。また、釘穴を有するものが多く、1孔のものもあるが、大部分のものは2孔である。

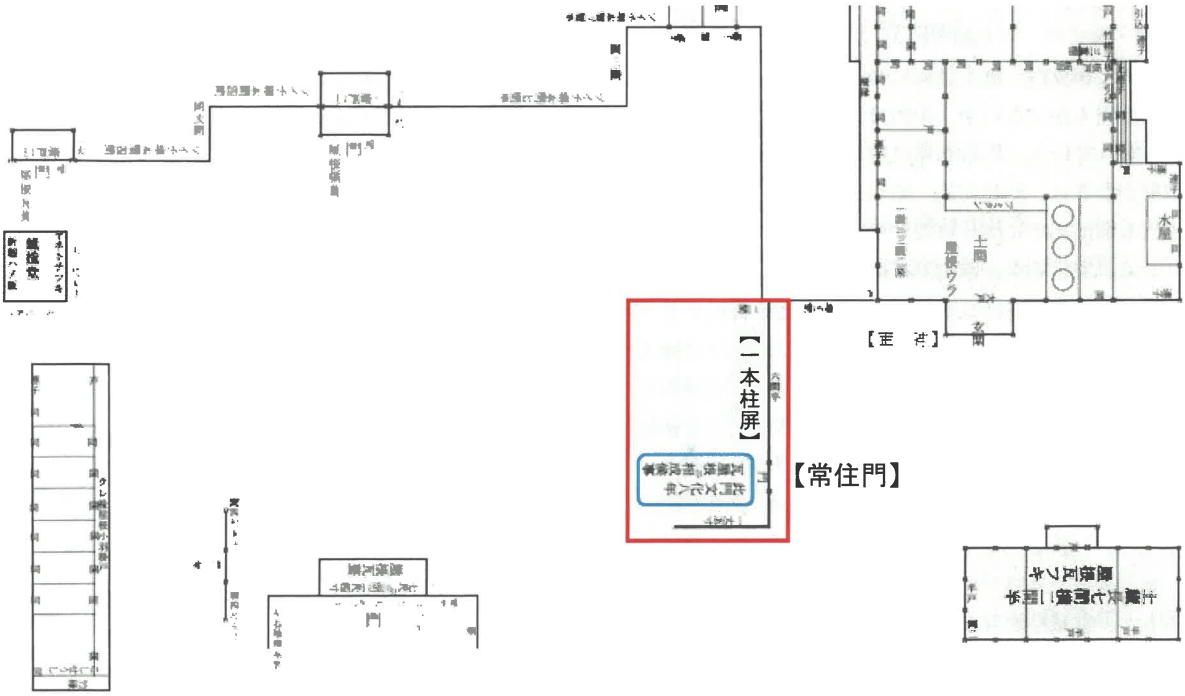
宮城県内で塀瓦の出土している主な遺跡をあげると、仙台城本丸跡、仙台城二の丸跡、仙台城三の丸跡、白石城三階櫓跡、瑞巌寺境内遺跡などがある。これらの遺跡出土の塀瓦には全体の形が分かる資料はほとんどないが、報告書の実測図・写真・観察表等を参照すると、本遺跡の塀瓦に長さ・幅・厚さ、桟の幅などが類似しているものがある。仙台城二の丸跡出土の塀瓦の分類でいう③長38cm・幅33cm前後のもの（東北大学埋蔵文化財調査研究センター1998）が該当し、仙台城三の丸跡出土の全体が分かる資料である長36.8cm・幅32.2cm・厚2.2cmのもの（仙台市教育委員会1985）もほぼ同じと考えられる。その使用年代については各報告書において不明と記載されているか、触れられていないのがほとんどであるが、仙台城二の丸跡第5次調査の報告書（東北大学埋蔵文化財調査委員会1993）において、出土した層位及び遺構（明治21年(1888)設置の陸軍第二師団に関係する土坑）などから塀瓦の年代をすべて幕末から明治の可能性が高いとされた。

瑞巌寺には、参道から庫裡や宝物館に向かうときに通る常住門があり、それに取り付く一本柱塀が現存している。観察したところ、葺かれていた塀瓦が御釜神社出土の塀瓦に形態・法量・色

調等が極めて類似していた。御釜神社出土の塀瓦と瑞巌寺宝物館所蔵の塀瓦との比較検討も行ったところ、両者の瓦はぴったりと重なるとともに、色調・焼成・胎土も極めて類似していた。このことから、両者の塀瓦は同じ時期に同じ工人によって製作され、同一の窯（群）で焼成された可能性が認められた（**註１**）。

瑞巌寺の平成の大修理に関する報告書（宗教法人瑞巌寺 2018）に掲載されている「御修復帳」には、「(貞享期）書き起し」(1684-88)、「(元禄期）書き起し」(1688-1704)、「(文政期）書き起し」(1818-30)があり、これらにも常住門とそれに取り付く塀が描かれている（**註２**）。東北大学蔵と思われる「御修復帳（文政期）書き起し」をみると、常住門の場所に「此門文化八年瓦屋根ニ相成候事」との追記の書入れがあり、文化 8 年(1811)に常住門を瓦葺にしたことが分かる。断定はできないが、この門の瓦葺きと同時に一本柱塀も瓦葺きされたとも考えることができそうである。あるいは、天保 6 年(1835)の藩祖伊達政宗の 200 回忌法要に向けて天保元年から天保 5 年

**第 13 図　瑞巌寺常住門と一本柱塀・塀瓦**



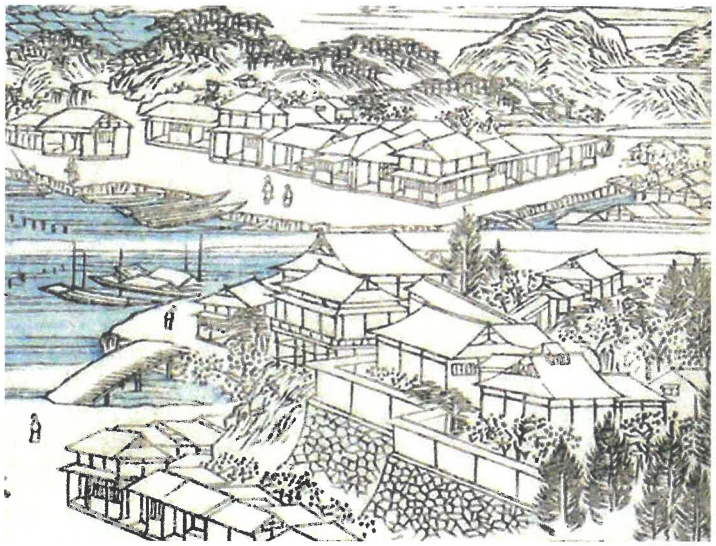

**第 14 図　瑞巌寺御修復帳（文政期）書き起し（部分）**（瑞巌寺 2018 に一部加筆）

(1830-34)にかけて本堂屋根の全面葺替や障壁画修理（部分）等の大規模修理が行われており（天保修理）、この時に塀が瓦葺になった可能性も考えられる。いずれにしても19世紀前葉には御釜神社の塀瓦と同じ特徴を有する塀瓦が製作され、使用されたのではないかと思われる（**註３**）。

塩竈の中心部は、慶応３年(1867)に出火した大規模な火災に見舞われ、村内の70%強が焼き尽くされ、御釜神社含む一帯も例外ではなく被災した（野田耕平1986）（**註４**）。しかし、御釜神社境内遺跡から出土した塀瓦には火熱を受けた痕跡が全く認められない。文政年間(1818-30)に描かれた「奥州名所図会」の「神竈社」（宮城県図書館蔵）（以下「名所図会・神竈社」と表記）の絵画には、釜之前町通に面する門の東西に塀があり、その西隅には社家宅と思われる東西に長い建物、そこから折れる白坂道や荷堀と接するように境内の西辺には数棟の建物が見られる。仮に門の東西の塀が瓦葺であったとしても、強い火熱を受けた瓦は火災後には再利用できず、撤去されたものと思われる。したがって、今回の調査で出土した塀瓦は、慶応３年(1867)以降に新規に製作された瓦か、他の施設等から運ばれてきた瓦かのどちらかであると考えることができる。

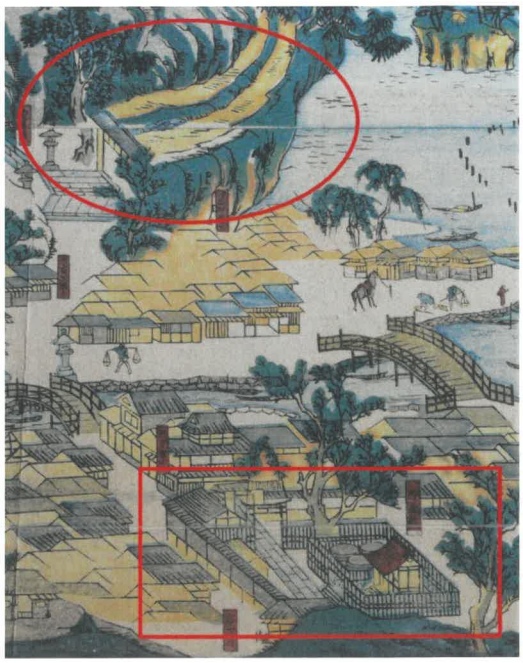
この時期は仙台藩では戊辰戦争を含む明治維新の激動の中であり、塩竈港入り口への常夜燈建設計画も台座のみの完成で中止になってしまったこと（**註５**）からも伺えるように、新規に製作した塀瓦で葺いた塀の再建も含めて御釜神社を再建させる状況ではなかったと思われる。そこで考えられるのは、神仏分離・廃仏毀釈の嵐の中で明治４年(1871)に廃寺（**註６**）となった鹽竈神社の別当寺であった法蓮寺の塀瓦である。法蓮寺について江戸後期に描かれた代表的な絵画には次のものがある。①前述の文政年間(1818-29)に描かれた「奥州名所図会」の「裏坂別当金光明山法蓮寺」の絵画（以下「名所図会・法蓮寺」と表記）、②塩竈在住で仙台藩四大画家の一人と称される小池曲江が天保８年（1837）に描いた「奥州一宮鹽竈神社図」（個人蔵）（以下「小池・鹽竈神社図」と表記）である。両者の絵画をみると、法蓮寺には、勝画楼の懸造りの箇所を除き門(黒門)のある南側から東側・北側にかけて塀が巡らされており、①の絵や現

**第15図　奥州名所図会・法蓮寺**



**第16図　小池曲江・鹽竈神社図（部分）**

地の状況から一本柱塀と推察される。それが明治になると、時期的には少し下るが、明治 11 年(1878)に作成された「陸前國宮城郡塩竈村一森山鎮座鹽竈神社」《版画》（塩竈市図書館蔵）（以下「明治 11 年・市図書館版画」と表記）や明治 13 年(1880)の作成かと推測されている「鹽竈神社案内図」（鹽竈神社博物館蔵）（以下「神社博物館絵図」と表記）には、簡易な木製の門が描かれているのみで塀は描かれていない。門や塀は撤去され、簡易な門が設置されたことが分かる。なお、法蓮寺は天保 10 年(1839)の火災で伽藍の大半が焼失（本殿・護摩堂・観音堂・鐘楼など）したが、類焼を免れた建物のうち書院と客殿の一部は改修されて現在の勝画楼として残存していることから、それより低位置で離れている門を含む南側及び東側の塀は火災を免れたと考えられる。



第 17 図　明治 11 年・市図書館版画

「明治 11 年(1878)・市図書館版画」や明治 10 年(1877)頃の作成かとされる「陸前国宮城郡塩竈村御釜社平面之図」（鹽竈神社博物館蔵、以下「明治 10 年頃・御釜社図」と表記）に記載された御釜神社の塀をみると、境内を区画するように塀が巡り、釜之前通に面した北辺の門に取り付く塀と白坂道に沿った西辺は板塀で、釜之前通に面する北辺にはさらに瑞垣を加えている（註 7）。

| | No. | 層位・遺構 | 名称 | 法量（mm） | | | | | 釘孔 | 調整 | | 備考 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 玉縁 | 高さ | | 凸面 | 凹面 | 色調 | 焼成 | 胎土 |
| | 1 | 建物内整地層 | 丸瓦 | 307 | 160 | 厚 27<br>薄 | 長さ 35<br>幅（74） | 尻 82<br>頭 54 | 無 | ケズリ→ナデ | 布目ナデ | 黄灰色 | 堅織 | 石英、長石黒色粒（多） |

| | No. | 層位・遺構 | 名称 | 法量（mm） | | | | | 釘孔 | 調整 | | 備考 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 玉縁 | 高さ | | 凸面 | 凹面 | 色調 | 焼成 | 胎土 |
| 当初 | 1 | 本　　堂 | 丸瓦 | 336～370 | 177～198 | 20～28 | 長 40～73 | 中 83～95 | | ケズリ→ナデ | | | | |
| 慶安 | 2 | 本　　堂 | 丸瓦 | 331～398 | 168～197 | 19～30 | 長 31～58 | 中 85～103 | | ケズリ→ナデ | | | | |
| 当初 | 3 | 廊下ほか | 丸瓦 | 291 | 151 | 20 | 長 41 | 中 72 | | ケズリ→ナデ | | | | |
| 慶安 | 4 | 廊下ほか | 丸瓦 | 285～316 | 144～158 | 18～23 | 長 21～34 | 中 62～80 | | ケズリ→ナデ | | | | |
| 天保 | 5 | 廊下ほか | 丸瓦 | 278～304 | 143～158 | 18～24 | 長 18～22 | 中 62～80 | | ケズリ→ナデ | | | | 會 |
| 不明 | 6 | 廊下ほか | 丸瓦 | 281～307 | 138～148 | 18～24 | 長 23～29 | 中 72～75 | | ケズリ→ナデ | | | | 安三 |

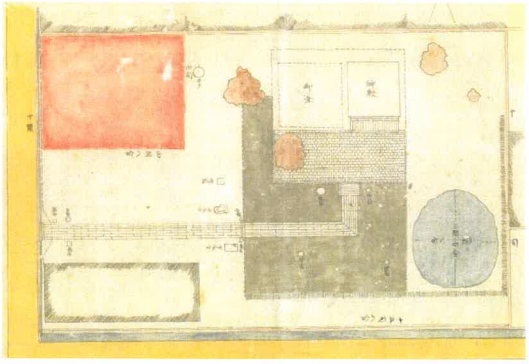
第２表　御釜神社と瑞巌寺の丸瓦比較表

北辺と西辺の板塀は絵図から推測すると一本柱塀であり、廃寺となって取り壊された法蓮寺から搬入された塀瓦で瓦葺されたともの考えて矛盾がない（註８）。

丸瓦も全体の形がわかる1について、法量や製作技法等を瑞巌寺の丸瓦と比較してみた。瑞巌寺では、本堂の瓦は廊下等の瓦に比して法量が一回り大きい。そこで、報告書（瑞巌寺 2018）の観察表から葺替の時期別表を作成した（第 2 表）。1の丸瓦は慶安期の修理瓦に法量等が近似していると思われる。天保期の修理瓦とは長さ・幅・厚さはほぼ一致するが、玉縁の長さが天保期のものよりも長いので、この時期のものではないと思われる。慶安期の葺替えは正保 3 年(1646)の地震の被害の復興として行われたもので、瓦の製作年代は慶安 3 年(1650)頃と考えられている（宮城県教育委員会 1987)。しかしながら 1 点のみで年代を確定することは難しいが、少なくとも天保期葺替の丸瓦の年代よりは古い瓦と考えられる。御釜神社の調査では年代の異なる塀瓦と丸瓦が、同じ建物跡内の同じ整地層のところから出土していることも、法蓮寺からの搬入品であることを裏付けているのではないかと思われる。ちなみに御釜神社と法蓮寺跡との距離は 180m ほどである。

第 18 図　明治 11 年・市図書館版画

第 19 図　明治 13 年か・神社博物館絵図



第 20 図　明治 10 年頃・御釜社図

### （２）遺構（建物跡・塀跡）の検討

今回の調査で発見された建物跡と塀跡は、基礎が塩竈石と一般に称される凝灰岩の切石で、白坂道に面する境内西辺において建物の西壁に塀が取り付いて直線的に伸びている。建物跡は梁行 3.5 間×桁行 2 間で南北に長い建物である。

前述の「明治 10 年(1877)頃・御釜社図」をみると、境内の北西隅には東西 2 間×南北 5 間程度の建物があり、その建物は北辺と西辺の塀の内側に配置されていることが分かる。「明治 11 年・版画」でも、境内北西隅には南北に長い建物跡が塀の内側に配置されている。今回の調査で発見された建物跡と塀跡は、建物の西壁とそれに取り付く塀が直線的に伸びて境内の西辺を区画している点などで、「明治 10 年(1877)頃・御釜社図」と「明治 11 年(1878)・版画」の建物や塀と相違しており、少なくとも明治 11 年(1878)以降に改築された建物跡と考えられる。

次に建物跡内の北東隅において、建物跡基礎石の据えられた第４層（明褐色粘土の整地層）の下の第５層上面で発見された鉄製の洋釘について検討

する。鉄製の洋釘は明治5年頃(1872)に輸入が始まり、その後、明治20年代((1887-1896)までにすべてが輸入品の洋釘に変わったとされている。日本で初めて洋釘が製造販売されたのは明治30年(1897)である（註９）。明治21年(1888)に貞山運河の一つである御舟入堀に架設された大代村浮動橋(現多賀城市)の設置工事の材料として、西洋釘・ボルト・コールタールなどが使用されており、当地においても明治20年頃には普及していたものと考えられる（高橋守克2017）。発見された洋釘は４寸釘と想定されることから国産の可能性が高い。従って建物跡と塀跡は明治30年以降のものと考えられる。

続いて建物や塀の基礎として使用された凝灰岩の切石(塩竈石)について検討してみたい。塩竈石の採掘は江戸時代後期に始まり、明治時代中期になると建築資材として急速に普及し多用され、同後期には海運業の活性化により貨物保管用の倉庫群などに使用されたという（三浦一泰2018)。現在のところ、塩竈市内で最古と考えられているのは、旧南新町（現海岸通り）に所在する仲忠鈴木家（海産物問屋）の建物の土台に使用された例である。この地区は慶応3年の大火の被害を免れたところで、2階床の間の梁の裏側に「己巳 初夏 富峰〇印塗之」とあり、己巳の年号から文化6年(1809)か明治2年(1869)が想定されるが、平成23年(2011)に調査に当たった高橋恒夫氏（当時東北工業大学教授）は当主の話も総合して文化6年の可能性が高いとした（高橋恒夫2012)。。文政年間(1818-30)の「名所図会・神竈社」や「名所図会・藻塩焼神事」の絵図にも、塩竈石の切石を用いたと思われる参道や神釜・社殿を祀る基壇が描かれていることからも妥当な見解であると思われる。

また、江尻と呼ばれる地域で、泉ケ岡(塩釜高校)方面から坂を下って来て旧仁井町を横切る道と旧祓川との交差する地点（御臺の橋の南袂）の調査では、江戸時代に積まれた自然石の祓川護岸の上に慶応３年の大火の被災後に積まれた凝灰岩の切石列と旧仁井町を横切る道に沿って屋敷との境界を画するような凝灰岩の切石列が発見されている（高橋守克 2000)。さらには、釜之前通を挟んで御釜神社の真向かいに所在する旧ゑびや旅館(旧海老藤蔵宅)の建物の床下を実見したところ建物内には荷堀が暗渠として祓川に注ぐように南から北に流れ、床下の土台として凝灰岩の切石が使用されていることを確認できた。他にも、土台用の石材として利用されている例がいくつか確認されている（**註 10**)。このように、凝灰岩の切石(塩竈石)は建物の土台用の石材、屋敷と屋敷や屋敷と道との境界を区画する石材、祓川護岸の嵩上げ用の石材などとして、江戸時代末から明治時代初期にかけて慶応３年の大火後の塩竈の復興に大きく寄与し、明治時代中期以降の建築資材等としての多用されていったことが伺われる。

これらのことから、幕末から明治初期にかけて慶応の大火被災からの塩竈復興の時期に、「明治10 年(1877)頃・御釜社図」や「明治 11 年(1878)・市図書館版画」にあるような、御釜神社の再建がなされた。境内の北西隅には塀の内側に配置された南北に長い建物が建築され、境内北辺と西辺の塀には板塀で明治４年に廃寺となった法蓮寺からの塀瓦が使用されたと考えられる。したがって、御釜神社の再建は明治 4・5 年(1871-72)頃と推測される（**註 11**)。また、調査で発見された建物跡や塀跡は、「明治 11 年(1878)・市図書館版画」の絵図との相違、鉄製洋釘の普及年代や塩竈石の多用された年代などから明治 20 年代中葉以降と考えられる。

### （３）御釜神社の変遷と遺構の検討

ここでは御釜神社に関する江戸時代と明治時代の主な絵図や写真等から四口の神釜や社殿の鎮座する位置や配置などについて、発掘調査で発見された遺構である建物跡や塀跡等と関連させながら検討し、御釜神社の変遷について考えてみたい。

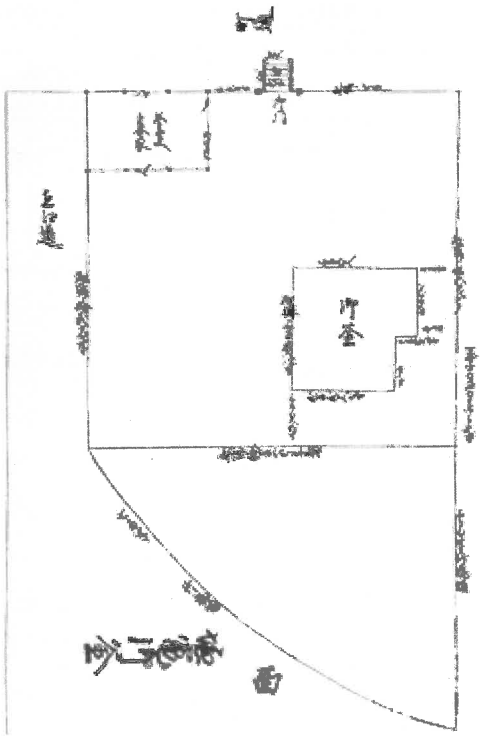
この時期の御釜神社の様子を把握できると思われる資料を第 3 表に示した。方角については、本書では釜之前通に面し門の存在する方角を北として執筆してきており、そのため、図に記載された方角と異なることもある。

| No. | 絵図等の名称 | 北　門 | 境　内区画柵 | 社家 | 境内西辺 | 神釜・社殿配置 | | 祓い所 | 池 | 参　　道 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | （年　代） | 北辺塀 | | （長辺） | | 神釜 | 社殿 | | | |
| 1 | 封内神社修繕帳 | ○ | × | ○ | 建物・塀 | 隣接して並ぶ？ | | × | × | ？ |
| | 寛文(1661-73)頃？ | ○ | | （東西） | | 西向き | ？ | | | |
| 2 | 東北大学修復帳 | ○ | × | ○ | 建物・塀 | 隣接して並ぶ？ | | × | × | ？ |
| | 宝暦5年(1755)以前 | ○ | | （東西） | | 西向き | ？ | | | |
| 3 | 県図書館修復帳 | ○ | × | ○ | 建物・塀 | 隣接して並ぶ？ | | × | × | ？ |
| | （3とほぼ同時期?） | ○ | | （南北） | | 西向き | ？ | | | |
| 4 | 神社仏閣下座所絵図 | ○ | ○ | ？ | ？ | 隣接して並ぶ | | ○ | × | ？ |
| | 寛保2年(1742) | ○ | | ？ | | 西向き | 西向き | | | |
| 5 | 仙台所々神社絵図 | ○ | ○ | ○ | ？ | 隣接して並ぶ | | ○ | × | ？ |
| | 宝暦11年(1761) | ○ | | （東西） | | 西向き | 西向き | | | |
| 6 | 名所図会・神竈社 | ○ | ○ | ○ | 建物・塀 | やや離れて並ぶ | | ○ | ？ | 一直線 |
| | 文政(1818-29) | ○ | | （東西） | | 西向き | 西向き | | | 凝灰岩？ |
| 7 | 御釜社平面図 | × | × | ○ | 塀 | 隣接して並ぶ | | × | ○ | 一直線 |
| | 明治10年(1877)頃？ | ○ | | （南北） | | 西向き | 西向き | | | 凝灰岩？ |
| 8 | 御釜社平面 1/40 | × | × | ○ | 塀 | 隣接して並ぶ | | × | ○ | 一直線 |
| | 近　代 | ○ | | （南北） | | 西向き | 西向き | | | 凝灰岩？ |
| 9 | 市図書館・版画 | ○ | ○ | ○ | 塀 | 隣接して並ぶ | | ○ | ？ | 一直線 |
| | 明治11年(1878) | ○ | | （南北） | | 西向き | 西向き | | | 凝灰岩？ |
| 10 | 神社博物館・絵図 | ○ | ○ | ○ | 塀 | 隣接して並ぶ | | ○ | ○ | 一直線 |
| | 明治13年(1880)頃 | ○ | | （南北） | | 西向き | 西向き | | | 凝灰岩？ |
| 11 | 神社境内図・銅版画 | × | × | ○ | 建物・塀 | 離れて個別に | | ○ | × | 屈　折 |
| | 明治33年(1900) | 低石塀 | | （南北） | | 西向き | 北向き | | | 井内石？ |
| 12 | 絵はがき（4枚） | ？ | × | ○ | 建物・塀 | 離れて個別に | | ？ | × | 屈　折 |
| | 明治40年～大正7年 | ？ | | （南北） | | 西向き | 北向き | | | 井内石？ |

第３表　御釜神社の絵図・写真等一覧表

【第Ⅰ期】

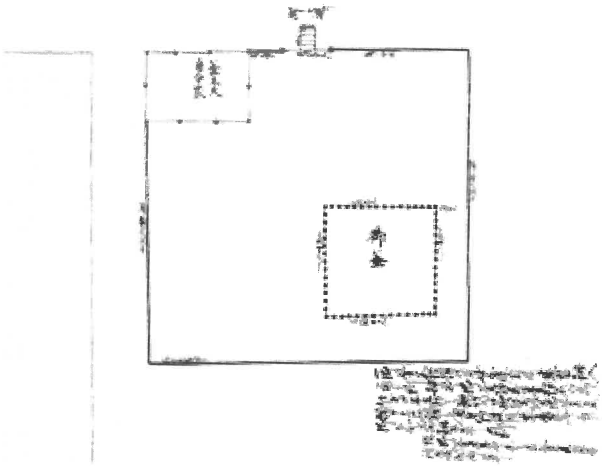
1 の資料「仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕　ニ属スル場所調」の「塩竈御釜」図（宮城県図書館蔵）（以下「封内神社修繕帳」と表記）が該当する。境内北辺に門があり、それに取り付く塀が境内を全周する。社家の建物(東西棟)が境内北西コーナーに所在し、それに取り付く塀とともに境内北辺(門の西側)と西辺の一部を構成する。神釜は境内の南東の位置にあって特別に区画され「御釜」とだけ表記されているが、その区画がＬ字状を呈し北と南では奥行きに差があることから、そこには神釜と社殿が西向きに並んで祀られていたと推測される。神釜と社殿の区画が何でなされていたかについては不明である。この資料の「法蓮寺」図は勝画楼調査（塩竈市教育委員会 2020）で寛文年間(1661-73)頃のものと推定されていることから、第Ⅰ期の御釜神社は 17 世紀後葉の状況を示しているものと思われる。



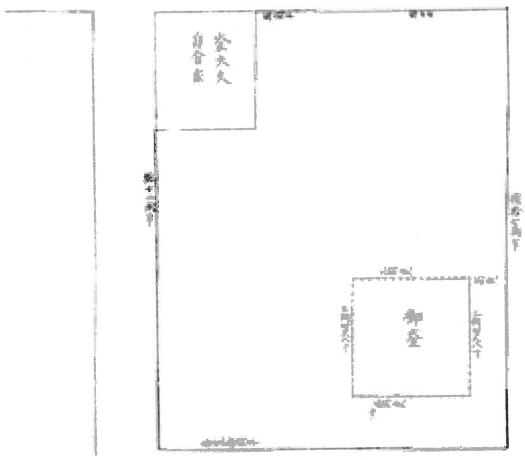
第 21 図　1. 封内神社修繕帳（第Ⅰ期）

【第Ⅱ期】

2 と 3 の資料が該当する。2 は「神社仏閣諸寺院諸役所萬恩藏共建替破損繕被成置候御修覆本帳」（東北大学蔵）（以下「東北大学修復帳」と表記）、3 は「御修復帳」（宮城県図書館蔵）（以下「県図書館修復帳」と表記）である。2・3 とも基本的には北辺の門、北西コーナーにある社家の建物、それらに取り付いて全周する塀のあり方、神釜と社殿のあり方など、第Ⅰ期と同様である。社家の建物が 2 では東西棟、3 では南北棟のように見える以外は 2・3 の図は類似している。ただ、御釜と社殿の区画がほぼ正方形になっている点が第Ⅰ期と相違している。この区画が何によってなされていたかについては不明である。2 の図は書入れから宝暦 5 年（1755）以前のものであり、「法蓮寺」図の年代が書入れより享保 13 年（1728）以前と推定されている（塩竈市教育委員会 2020）。3 もそれに近い年代



第 22 図　2. 東北大学修復帳（第Ⅱ期）
（東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻 空間文化史学分野 野村研究室所蔵）



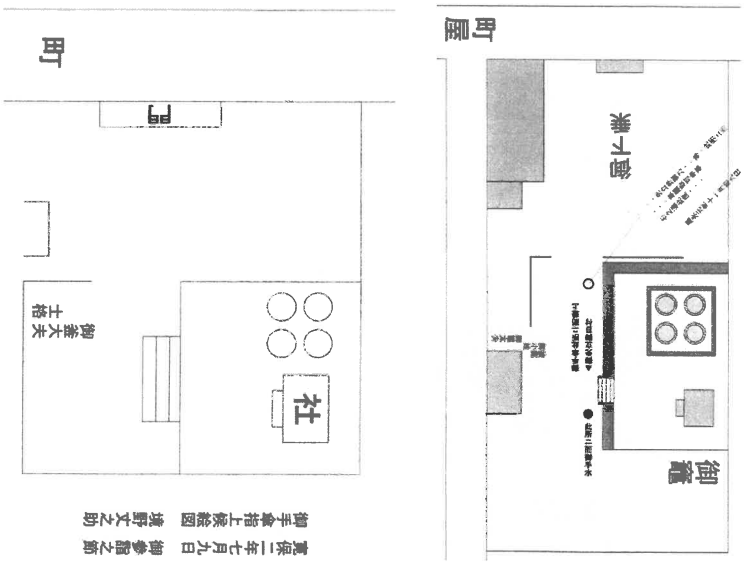
第 23 図　3. 県図書館修復帳（第Ⅱ期）

が想定され、第Ⅱ期は18世紀前葉以前の状況を示しているものと思われる。2・3の社家の建物に相違があり改築がなされたことが想定され、第Ⅰ期と同じ東西棟の2は南北棟の3より古く位置づけられよう。なお、佐久間洞巖が享保13年（1728）の「陸奥國塩竈松島図」に御釜神社を描いているが、北門と塀、社家、四口の神釜がシンボライズに誇張されて描かれている。

**【第Ⅲ期】**

4と5の資料が該当する。4は「神社仏閣下座所絵図」（鹽竈神社博物館提供）（以下「下座所絵図」と表記）、5は「仙台所々神社絵図」（仙台市博物館蔵）（以下「所々神社絵図」と表記）である。4は寛保2年（1741）に作成された藩主参詣の際の御手傘の位置を確認するためのメモ的な図で、5は宝暦11年（1761）に作成された藩主参詣の際の乗り物の下乗位置を確認するための図である。北門に取り付いて境内を全周する塀や北西コーナーの社家のあり方は、基本的に第Ⅰ期・第Ⅱ期と同じである。第Ⅰ期・第Ⅱ期と異なる大きな変化は、①神釜と社殿が基壇上に西向きに鎮座し、奥（東）が境内東辺の一部となっていること、②祓所と思われる建物が境内西辺に接して設置されていること、③境内を神釜・社殿・祓所エリア（南側）と社家・下乗エリア（北側）に分離する柵のようなものが設置されたことである。4はメモ的な図のため、社家や境内西辺の北側を省略し描いていない。4・5とも作成年が明確であり、第Ⅲ期は18世紀中葉の状況を示しているものと思われる。なお、5の資料には、嘉永元年（1848）と安政2年（1855）の書入れがあり、仙台藩ではこの図を幕末まで用いていたことが推測される。

この時期のものとされる絵図には、長久保赤水の「東奥紀行」（宝暦10年（1760）、鹽竈神社博物館蔵）、坂口員正の「陸奥紀行（千賀浦塩釜社）」（寛政8年（1796）、東北大学附属図書館蔵）、作者不詳の「塩竈松島図屏風」（福岡市美術館蔵）がある。長久保の絵図は佐久間と同様に柵に囲われた神釜をシンボライズしたものである。坂口の絵図は境内の北半を描いたものではあるが、門や瓦葺かと思われるような塀と柵で囲われた神釜や隣接する社殿か社家らしき建物が描かれている。作者不詳の絵図に描かれた御釜神社は河岸や法蓮寺との位置関係及び神釜の位置なども不正確であるが、シンボライズした神釜を含む神社全体が柵で囲まれ、沿道の周りに建物が並んでいることから、次の第Ⅳ期に相当するのではないかとも考えられる。

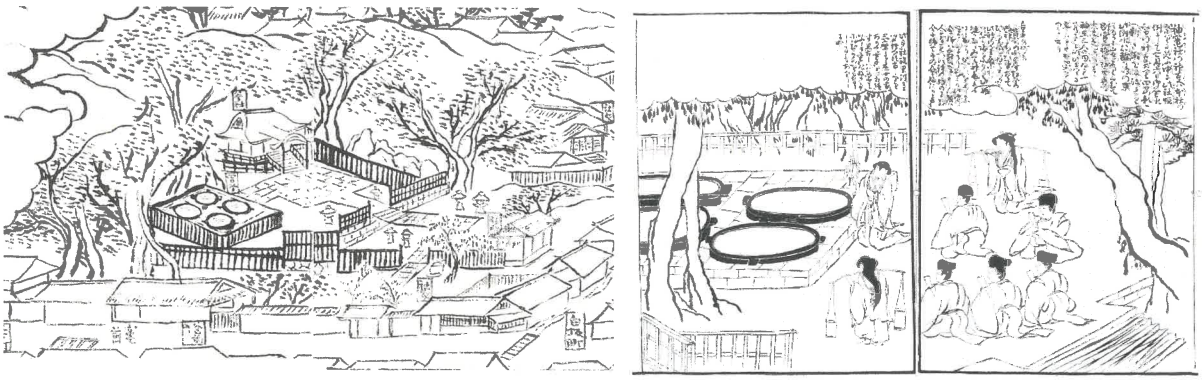



第24図　4. 下座所絵図（左）と5. 所々神社絵図（第Ⅲ期）

**【第Ⅳ期】**

6の資料「奥州名所図会」の「神竈社」図及び「藻塩焼神事」図（宮城県図書館蔵）が該当する。神釜・社殿の鎮座する基壇や境内を南北のエリアに分離する柵の存在なども含めて、基本的

には第Ⅲ期と同じである。参道や基壇に塩竈石と思われる切石が使用されていること、基壇が拡張され神釜と社殿の位置が少し離れて鎮座していること、境内西辺の白坂道沿いには塀ではなく社家から続く建物が並んでいること、西辺と接していた祓所が内側に設置されたことなどが、第Ⅲ期と相違している。参道は門から直線的に南に延び、神釜・社殿の鎮座する基壇に向かって左折している。神釜・社殿の位置から推測すると、第Ⅰ期から第Ⅲ期までもこのような参道のあり方であると思われるが、石敷きでないため参道が表現されなかったものと思われる。第Ⅳ期は、この絵図が文政年間(1818-30)に描かれたと考えられていることから 19 世紀前葉の状況を示していると思われる。これが現在のところ御釜神社の様子を確認できる江戸時代最後の図であり、慶応 3 年(1867)の大火で焼失した御釜神社の姿か、それに近い姿ではないかと推測される。



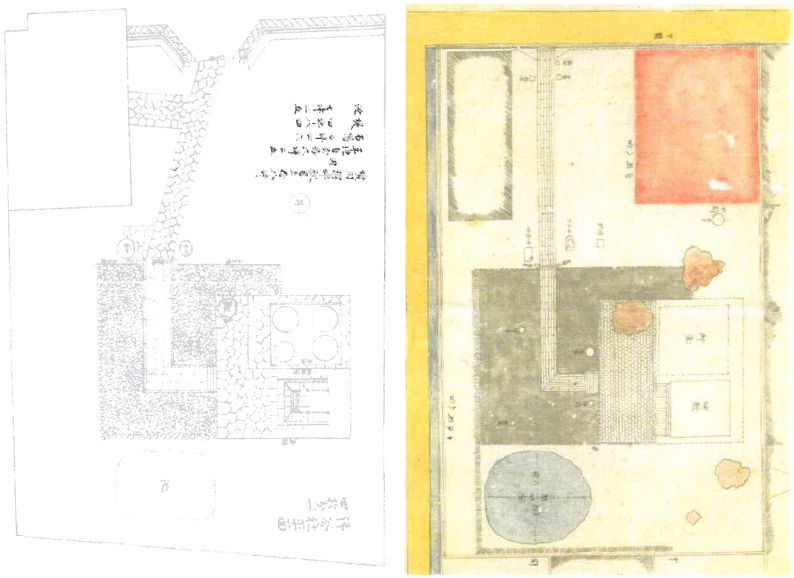
第 25 図　6. 奥州名所図会の神竈社と藻塩焼神事（第Ⅳ期）

【第Ⅴ期】

7 から 10 の資料が該当する。そのうち、7・8 は第Ⅴ-1 期、9・10 は第Ⅴ-2 期と考えられる。

第Ⅴ-1 期の 7 は近代の作成と推測されている「御釜社平面図」（鹽竈神社博物館蔵）で、8 は明治 10 年頃の作成かと推測されている「明治 10 年頃・御釜社図」（鹽竈神社博物館蔵）である。第Ⅳ期の「名所図会・神竈社」と比較すると、明治時代になって境内の面積が減少しているようにみえる。南北のエリアを分離する柵は石玉垣や瑞垣に変わり、祓所がなくなり、新たに境内南西に池が造られる。

7・8 の図を見ると北辺の門はないが、石敷きの参道、門に近い位置の鳥居、石敷きの基壇の上に並んで西向きに鎮座する神釜と社殿及び玉石敷き、境内の南西に新たに造られた池などは共通している。相違点としては、北西コーナーの社家のあり方、参道から社家への石敷きと参道



第 26 図　7. 御釜社平面図と 8. 明治 10 年頃御釜社図（第Ⅴ-1 期）

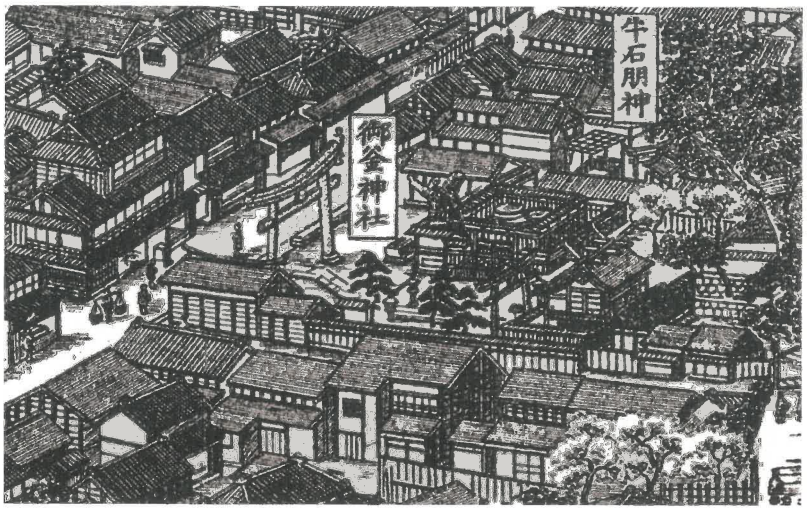
西の手水石付近の石敷きの有無があげられる。7 の社家が北側の釜之前通にはみ出ている点に不自然さもあるが、前述のように 7・8 図は慶応 3 年の大火後の御釜神社の暫定的な再建の状況を示していると思われる。その年代は法蓮寺の廃寺や塀瓦の搬入の年代などから明治 4・5 年(1871-72)と考えられ、両者の相違点は復旧のプロセスを表している可能性もある。

第Ⅴ-2 期の 9 は「明治 11 年(1878)・市図書館版画」(塩竈市図書館蔵) で、10 は明治 13 年(1880)頃かと伝えられる「神社博物館・絵図」(鹽竈神社博物館蔵) である。9・10 図には相違点がほとんどない。両図では第Ⅴ-1 期と異なり、新たに北辺の門、南北のエリアの境に鳥居と柵、南エリアには祓所が造られる。これらは慶応の大火による焼失前の第Ⅳ期の 6 図との類似点が多く、第Ⅴ-1 期の暫定的な再建から本格的な再建として完成した状況を示していると思われる。その年代は明治天皇の東北巡幸に間に合うように再建されたものと推定でき、明治 9 年(1876)以前と考えられる。なお、明治 27 年(1894)に蜂屋十馬が描いた銅版画「国幣中社鹽竈神社明細全図」には、第Ⅴ-2 期と同じく基壇の上に神釜と社殿が西向きに並んで鎮座している様子がみられ、少なくとも明治 24 年まではこの配置が続く。

**第 27 図　9. 明治 11 年・市図書館版画と 10. 明治 13 年頃・神社博物館絵図（第Ⅴ-2 期）**

**【第Ⅵ期】**

11 の資料「陸前國鹽竈神社境内図附松嶋及附近名所」(鹽竈神社社務所発行)（以下、「明治 33 年(1900)・神社境内図(銅版画)」と表記）が該当する。第Ⅴ-2 期とは大きく変化する。再び北辺の門がなくなり、北辺の塀は塩竈石の切石を低く積み上げたようになる。社殿は神釜から離れて境内の南西隅に遷宮し、北向きに鎮座する。そのため、参道




**第 28 図　11. 明治 33 年・鹽竈神社境内図銅版画（第Ⅵ期）**

が屈折して社殿に至るとともに、南北のエリアを区画する柵もなくなる。祓所と思われる小さな建物は社務所の南に接するように設置され、それに取り付く一本柱塀が境内西辺を構成する。この第Ⅵ期の開始年代は明治 24 年から明治 33 年の間に求められる。この間の大きな変化の要因として、明治 29 年(1896)6 月 15 日に発生した明治三陸地震津波が考えられる。マグニチュード 8.2 と想定され、死者・行方不明者約 22,000 人、流失破壊家屋 13,000 戸の被害をもたらした大規模災害である。塩竈の被害状況は不明であるが、近年の調査結果では塩竈には高さ 2.2m、塩竈市街地には高さ 2.0m の津波が押し寄せたとされている（宮城県災害対策課 2012)。津波によって第Ⅴ-2 期の社殿や建物・塀などが大きな被災を受けるとともに、運ばれてきた津波堆積土によって境内も覆われたものと推測される。その被災からの大規模再建の姿を 11 の資料は示していると考えられる。したがって再建の年代は、明治 29 年(1896)から明治 33 年(1900)の間と推定される。

**【第Ⅶ期】**

12 の資料「明治 40 年(1907)から大正 7 年(1918)の期間に発行された絵はがき 4 枚」(以下「明治の絵はがき」と表記）が該当する。4 枚のうちの 1 枚には、第Ⅴ-2 期の社務所の建物の位置に凝灰岩の切石の土台に桟瓦葺の屋根と庇を有する建物及びそれに取り付く塀瓦葺の一本柱塀が写っている（註 12)。神釜と社殿の基壇には塩竈石の切石が使用されているが、参道や鳥居は井内石のようである。建物が境内北辺から少し離れていること、建物の規模や建物と塀の取り付き方などから、今回調査で発見された遺構と同一であると考えられる。第Ⅵ期の銅版画と写真を比べると、参道のあり方や神釜と社殿の位置やあり方、社家の建物や一本柱塀のあり方などに共通点が認められるものの、建物の規模や庇の有無・屋根瓦の有無、祓所と思われる小さな建物の有無、塀の横木の位置などにも違いが認められ、両者にみられる建物と塀は別の時期のものと判断される。

絵はがきは、明治 40 年(1907) から大正 7 年(1918)の期間に発行されたものであり、4 枚のうちの 1 枚には明治 45 年(1912)に完成した境内の噴水も写っていることから、明治45年から大正7年の間に発行されたものと考えることができる(註12)。したがって、第Ⅶ期の始まりは大正 7 年以前の時期と考えられる。ここで参道や鳥居に使用された石が井内石に変化していること、加えて調査で検出された建物跡の入り口(玄関)にも井内石が敷かれていることを考慮に入れると、明治 41 年(1908)に鹽竈神社参拝道の一つ

第 29 図　12. 絵はがき（社務所と社殿）（第Ⅶ期）

である裏坂における井内石による石段の改修や暗渠水路の整地等の大規模改修工事と関連して施工された可能性が高いと思われる。この大工事は皇太子殿下(のちの大正天皇)の東北巡幸にともなう鹽竈神社参詣の記念事業として竣工された。これらのことから第Ⅶ期の御釜神社は明治41年(1908)の事業で行われ、大正7年頃までは存続していたと考えることができる。

御釜神社の塀に使用された塀瓦は、廃寺となった法蓮寺から搬入され第Ⅴ-1期から第Ⅶ期まで継続して使用された。第Ⅶ期の始まりには塀が短くなり不要になった塀瓦は、建物跡の建築時に床下の地盤補強などとして置かれたのではないかと考えられる。そして、大正7年以降にこの建物と塀が基礎の凝灰岩切石を残して解体された時点では、建物と塀に用いられていた瓦は廃棄され、建物内の瓦だけが残されたと考えられる。

## 第Ⅵ章　まとめ

今回の発掘調査は鹽竈神社の多大なご理解とご支援、そして例言に載せさせていただいた多くの方々のご指導とご協力をいただき、調査費用も皆無で時間的な制約もあるなかでの緊急調査であったが、発掘調査とそれに関連してこれまでの調査・研究による成果といくつかの課題が認められた。それらの主なものには、次のようなものがある。

1．発掘調査の地点は、御釜神社の境内の北西隅から西端に当たる。そこは東日本大震災で被災した社務所があった場所で、とりわけ北西隅の場所は江戸時代の絵図に釜太夫自分家とか社家として描かれているところでもある。明治時代の平面図や銅版画・写真にもほぼ同位置に同様な建物が存在している。

2．発掘調査では、境内北西隅にあたる場所で凝灰岩の切石(塩竈石)を基礎とする建物跡とそれに取り付く塀跡の遺構が発見された。遺構の切石は他地域から搬入された粘土の整地層の上に据えられ、建物跡の西辺と塀跡が一直線に延び、これらは境内の西辺にもなっていたことから、一体の事業として施工されたものと考えられた。これらの遺構の年代は、明治41年から大正7年頃と考えられ、塩竈石の用途や使用年代に関する貴重な資料となった。

3．主な出土遺物には、塀瓦・丸瓦・鉄製洋釘・材木片・貝殻片などがあった。特に、塀瓦は瑞巌寺常住門に取り付く一本柱塀の塀瓦と同じ窯(群)で焼成されたと推測され、瑞巌寺修復帳への書入れから江戸時代後期 19 世紀前葉には使用された瓦であると考えられた。宮城県内で塀瓦の使用年代が特定されたのは初めてである。丸瓦はその特徴から天保期のものよりも古い時期のものと考えられ、塀瓦とともに明治4年に廃寺となった法蓮寺からの搬入品であると考えられた。鉄製洋釘の使用年代は明治30年以降であることから、洋釘の当地へ普及状況を示す貴重な事例となった。また、建物跡の鬼門とされる北東隅で発見された鉄製洋釘・材木片・貝殻片は、地鎮祭的な祭祀の痕跡を示す可能性も考えられた。

4．現在確認できる御釜神社に関する江戸時代と明治時代の絵図や写真及び発見された遺構などの検討から、当該時期の御釜神社には7期の変遷があったと考えられた。内訳は江戸時代に4期（第Ⅰ期～第Ⅳ期)、明治時代に3期（第Ⅴ期～第Ⅶ期）である

| | 年　　代 | 資　料　な　ど |
|---|---|---|
| 第Ⅰ期 | 17世紀後半の状況 | 「封内神社修繕帳」 |
| 第Ⅱ期 | 18世紀前葉以前の状況 | 「東北大学修復帳」、「県図書館修復帳」 |
| 第Ⅲ期 | 18世紀中葉の状況 | 「下座所絵図」、「所々神社絵図」 |
| 第Ⅳ期 | 19世紀前葉の状況 | 「奥州名所図会」の「神竈社」「藻塩焼神事」 |
| 第Ⅴ期 | 明治４・５年に暫定的再建（第Ⅴ-1 期）<br>明治９年以前に本格的再建（第Ⅴ-2 期） | 「明治 11 年・市図書館版画」、「神社博物館絵図」<br>明治天皇の東北巡幸 |
| 第Ⅵ期 | 明治29年から33年の期間に再建 | 明治三陸地震津波、「明治33年・銅版画」 |
| 第Ⅶ期 | 明治41年<br>調査で発見された遺構 | 「明治の絵はがき」<br>皇太子殿下（のちの大正天皇）の東北巡幸 |

第Ⅰ期・第Ⅱ期では図からは神釜と社殿の配置等は明らかでないが、第Ⅲ期では神釜・社殿が基壇に並んで遷座し祓所が設けられるとともにそのエリアと下乗エリアが区別されるようになる。第Ⅳ期には参道が石敷き（塩竈石）になり、神釜と社殿が並んでいるが少し離れて遷座する。そして、慶応３年(1867)の大火に被災する。

第Ⅴ期は慶応の大火からの復興期にあたる。第Ⅴ-1 期では廃寺となった法蓮寺の塀瓦を搬入するなどして明治４・５年には暫定的な再建がなされる。門はなくなるが、池が造られる。第Ⅴ-2 期は明治 9 年の明治天皇の東北巡行に間に合うように本格的な再建がなされる。門が復活し、再びエリアを区画する柵や祓所などが設置される。第Ⅵ期は社殿が神釜の位置から離れて境内の南西の位置に北向きに遷座するなど、様相が一変する。門や南北を区画する柵などもなくなり、社務所に祓所が隣接し、参道も屈折する。このような大きな変化の要因として明治 29 年の明治三陸地震津波が考えられる。第Ⅶ期は参道や鳥居に井内石が使用される。社務所と思われる発掘された土台石（塩竈石）の建物跡や塀跡はこの時期の遺構と考えられる。建物跡の出入口にも井内石が敷かれていることなどから、第Ⅶ期は皇太子殿下（のちの大正天皇）の東北巡幸にともなう鹽竈神社裏坂工事に関連して施工されたと考えられる。

５．次に調査を通して見えてきた課題の主なものを以下にあげてみたい。

① 基本層序の各層が御釜神社内でどのような広がりをもっているか把握できなかった。またそれらの層の成因を把握するための科学的な分析等を実施することができなかった。例えば、第３層が昭和三陸津波、第２層がチリ地震津波（註 13）によって形成された可能性の検討などである。鉄製洋釘や材木片の科学的分析検討もできなかった。

② 絵図から江戸時代の社家の建物が今回発見された建物跡とほぼ同じ位置にあったと推定されるが、その建物の痕跡が発見された建物跡の建築時に壊されてしまっているのか、その下から見つかる可能性があるのかについて判断するまでには至らなかった。

③ 塩竈の発展の基礎にもなった古代からの埋め立てと街づくりの変遷に関する手がかりを得

るまでには至らなかった。

④　建物跡の下から慶長・貞観・弥生時代中期などの津波痕跡、そして縄文時代から古代にかけての製塩の痕跡等が発見される可能性もあったが、その手がかりを得るまでには至らなかった。

これらのことは、御釜神社境内の調査だけでは解明が難しいことでもあるが、塩竈で先人たちが幾多の災害や困難を乗り越えて築いてきた貴重な足跡を地道に辿っていくことが重要である。塩竈の地名の由来となった製塩遺跡の実態や技術の変遷、縄文・弥生・古墳時代の生業、古代陸奥国府多賀城の国府津(香津)の実態と鹽竈神社との関連、古代の集落の実態、古代以降の塩竈の街並み形成、法蓮寺の実態…など、数多くの課題が存在する。残念なことに過去の開発行為等によって調査もされず解明もされず失われてしまった文化財もある。そのためにも旧市街地、とりわけ江戸時代の河岸（壱番館付近）より西側の地区を中心に発掘調査をはじめ旧家等に残されている各種の文化財的な資料の調査に丹念に取り組んでいくことによって、ひとつひとつ塩竈の歴史・文化などを解明し後世に伝えていくことができるものと思われる。

## 註

(註１)　平成 31 年(2019)、所用で瑞巌寺を訪問した折、庫裡や宝物館に向かうときに通る常住門に取り付く一本柱塀を観察したところ、葺かれていた塀瓦が御釜神社出土の塀瓦に形態・法量・色調等が極めて類似しているのに気づいた。そこで瑞巌寺学芸員の新野一浩氏の承諾を得て、大まかな法量等の計測と写真撮影を行った。数日後に御釜神社出土の塀瓦を持参し、新野一浩氏の計らいで瑞巌寺宝物館所蔵の塀瓦との比較検討も行った。

(註２)　江戸時代に仙台藩によって作成された複数の「御修復帳」がある。瑞巌寺の平成の大修理に関する報告書（宗教法人瑞巌寺 2018）に掲載されている「御修復帳」には、「(貞享期）書き起し」(1684-87)、「(元禄期）書き起し」(1688-1703)、「(文政期）書き起し」(1818-29)がある。

(註３)　瑞巌寺の一本柱塀の現在の基礎は、御影石(花崗岩)である。新野一浩氏のご教示によれば、本堂周りに敷かれた石、御成玄関内側の石の間の四半敷石、御成門・中門・太鼓塀の基礎に使用された石も御影石である。これらの御影石は明治 34 年から 36 年(1901-03)に行われた大規模修理（明治修理）の際に施工された可能性があるとのことである。その修理が門や塀の基礎まで施工されたかどうか明確ではないが、そうだとすれば一本柱塀の基礎もこの時に改修された可能性があるが、塀瓦はそのまま再利用されているのではないかと思われる。

(註４)　塩竈市史Ⅲによれば、慶応 3 年(1867)2 月 6 日の夜に、塩竈の中心部は新河岸から出火した大規模な火災に見舞われ、焼き尽くされた。被災地は仁井町・釜之前・上本町・下本町・中宿・南町・舟戸・白坂に及び、焼失家屋 337 戸、焼死者男 19 名・女 16 名(東園寺の碑によれば 36 名)も出す大火であった。

(註 5)　東北大学災害科学国際研究所の佐藤大介准教授が大竹家（仙台市太白区）に伝わる古文書の調査をしていた際に「六角正面図」及び「諸事手控帳」（慶応元年：1865）を発見した。前者には一辺約 3.3m の六角形の石の台座の上に高さ約 12m の常夜燈が描かれ、後者には常夜燈建設に必要

な資材が記入されていたという。塩竈港を見渡せる法蓮寺境内の南東端に当たる勝画楼のすぐ南側に六角形の石の台座が残っている。台座が完成したところで工事は中止され常夜燈建設は未完成となったが、その理由として幕末の情勢が影響を及ぼしたのではないかと推測されている。（2016 年 11 月 29 日付け河北新報朝刊掲載）

(註６） 法蓮寺の廃寺の時期について、明治 2(1869)年・3 年・4 年と記述する文献が見られる。佐澤廣胖の「塩社略史」(明治 35 年：1902)の記述を要約すると次のようになる。明治 2 年に藩令による別当の廃止・法蓮寺及び脇院等は藩に返還され、法蓮寺は他に移転することになった。その墟には塩竈神務所が創設され、ほどなく廃藩置県（明治 4 年：1871） となった。ここでは茂木裕樹氏の明治 4 年の廃藩置県に至るまで一時期法蓮寺に塩竈神務所が置かれたと解す見解に従い、廃寺は明治 4 年としておきたい（茂木裕樹 2018)。ちなみに宮城県の「明治天皇聖蹟志」(大正 14 年：1925)に明治 4 年廃寺の記述がある。

(註７） 鹽竈神社博物館蔵の「陸前国宮城郡塩竈村御釜社平面之図」は、明治 10 年(1877)頃に作成されたと伝えられている。仮にそれが相違していたとしても明治 22 年(1889)2 月 9 日には塩竈町になっていることから、それ以前の図である。

(註８） 阿部光浩氏によれば、勝画楼の懸けづくりの北東部付近で廃寺に伴って廃棄された法蓮寺の多量の瓦片を環境美化作業の折に発見したという。筆者と白谷明彦氏が同所を探査したが竹林になっており発見できなかったが、勝画楼玄関の近くで数点の瓦片を採集することができた。したがって、廃棄されることになった瓦を再利用することは可能であったと思われる。

(註９） 安田工業株式会社の「釘物語」によれば、鉄製の洋釘は明治 5 年頃(1872)にフランスより輸入が始まり、その後、イギリス・ベルギー・ドイツ・オーストラリア・アメリカの順に輸入されていき、明治 20 年代(1887-1896)までにすべてが輸入品の洋釘に変わったとされている。その後、明治 30 年(1897)に同社によって初めて国産の洋釘が製造販売された。

(註 10) 旧ゑびや旅館の建物の床下を昭和 50 年代に所有者の松田世一氏のご厚意で拝見させていただいた折に、床下の土台として凝灰岩の切石を確認できた。この建物は慶応 3 年の大火以後に海老藤蔵宅（ゑびや）として建てられ、明治 9 年(1876)の明治天皇の東北巡行の際に随行した大隈重信以下 24 名が宿泊している。この建物も東日本大震災の時に床の高さに達するほどの津波被害を受けているが、大和田庄治氏によれば、その床下清掃作業時にも建物の土台として凝灰岩の切石が用いられていることを確認しているとのことである。その後、建物は NPO みなとしおがまで譲り受け、現在ではまちかど博物館として管理・運営されている。

(註 11) 明治 4・5 年頃に再建されたと考えられる御釜神社の建物の土台として、凝灰岩の切石が使用された可能性も考えられるが不明である。今回の調査で発見された建物に伴う凝灰岩の切石が、破断面や面取りの等の状態からみて、他施設等からの再利用（転用）ではなく新たな石材であることは明らかである。

(註 12) 阿部光浩氏によれば、絵はがきの宛名面の「郵便はがき」の表記が「きかは便郵」となっていて、しかもその面の通信欄の仕切り線が下から 1 ／ 3 の位置にあるものは、明治 40 年 4 月から大正 7 年 3 月にかけて発行されたものだという。

(註 13)　各種資料からは、津波の高さは押しなべて昭和 8 年(1933)の昭和三陸地震では塩竈港で 1.5m、塩竈市街地で 1.4m とされており、チリ地震津波では塩竈港奥で 2.7～2.8m（相原 2015）とされている。

## 引用参考文献


相原淳一 2015 「特別名勝松島における防潮堤整備に関する覚書－特に、チリ地震津波最大波高に関して－」季刊地理学 67－1

伊藤清郎 1983 「奥州一宮塩釜神社について」宮城の研究３　清文堂

今村鏘介・小川澄夫編 1980「写真集 明治・大正・昭和 塩釜・松島」国書刊行会

ＮＰＯみなとしほがま2006「しほがまみなと昔話－鎌倉から江戸・大正－」

大塚徳郎 1959 「鹽竈神社史」塩竈市史Ⅲ別編Ⅰ　塩竈市役所

加藤　晃 1989 「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」史学研究集録第 14 号 國學院大學日本史専攻大学院会

金子　智 1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒桟瓦の地方色」古代第 101 号

金子　智 2014 「江戸時代における造瓦技術の変遷」考古学ジャーナル 652 号

九州近世陶磁学会 2009「江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通―関東・東北・北海道編―」

小池曲江没後 150 年記念の会実行委員会 1997 「小池曲江の絵画」

斎藤善之 2019 「塩竈の御仮屋御殿と勝画楼について」塩竈学問所講座発表資料

塩竈市教育委員会 2020 「勝画楼調査報告書」塩竈市文化財調査報告書第 10 集

宗教法人瑞巌寺 2009 「瑞巌寺境内遺跡―新宝物館建設に伴う発掘調査報告書―第 1 分冊」

宗教法人瑞巌寺 2009 「瑞巌寺境内遺跡―新宝物館建設に伴う発掘調査報告書―第 2 分冊」

宗教法人瑞巌寺 2018 「国宝瑞巌寺本堂ほか 7 棟保存修理工事報告書」

織豊期城郭研究会 2018「全国織豊期城郭瓦基準資料集成 続 瓦研究の新視点」

白石市教育委員会 1998 「片倉小十郎の城 白石城発掘調査報告書」白石市文化財調査報告書第 26 集

仙台市教育委員会 1985 「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第 76 集

仙台市教育委員会 2005 「仙台城本丸跡 1 次調査―石垣修復工事に伴う発掘調査報告書―出土遺物編」仙台市文化財調査報告書第 282 集

仙台市教育委員会 2005 「仙台城跡 5 ―平成 16 年度調査報告書―」仙台市文化財調査報告書第 285 集

仙台市教育委員会 2009 「仙台城跡―仙台市高速鉄道東西線関係遺調査報告書―」 仙台市文化財調査報告書第342集

高橋孝三郎 2017 「ゑびやの歴史」 市民が作る塩竈歴史案内第 3 集　NPO みなとしおがま

高橋恒夫 2012 「被災した塩竈の伝統的町家建築の調査から」塩竈学問所講座発表資料

髙橋守克 2000 「近世塩竈の街並み調査」宮城史学第 19 号（塩竈市文化財調査報告書第 6 集）

髙橋守克 2017 「御舟入堀に架設の宮城郡大代村浮動橋－宮城県庁文書資料を通して－」宮城史学第 36 号

高橋守克 2020 「遺跡が語る！宮城の災害の歴史」荒武賢一朗・野本禎司・藤方博之編「古文書が語る東北の江戸時代」吉川弘文館
高浜市やきものの里かわら美術館　2013 「みちのくの瓦―東北と三州をつなぐもの―」
坪井利弘 1976 「日本の瓦屋根」理工学社
坪井利弘 1977 「図鑑瓦屋根」理工学社
東京大学埋蔵文化財調査室 1990 「山上会館・御殿下記念館地点」東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 「東北大学埋蔵文化財調査年報１」
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 「東北大学埋蔵文化財調査年報 3」
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 「東北大学埋蔵文化財調査年報 4・5」
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 「東北大学埋蔵文化財調査年報 6」
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 「東北大学埋蔵文化財調査年報 7」
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 「東北大学埋蔵文化財調査年報 8」
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 「東北大学埋蔵文化財調査年報 9」
内閣府 1960 「チリ地震津波」 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会報告書
野田耕平 1986 「明治以降の町の姿と世相の変遷」塩竈市史Ⅳ
松島町教育委員会 2014 「瑞巌寺境内遺跡―瑞巌寺本堂他七棟解体工事に伴う発掘調査報告書―」松島町文化財調査報告書第５集
松島町教育委員会 2015 「瑞巌寺境内遺跡―瑞巌寺参道再生工事に伴う発掘調査報告書―」松島町文化財調査報告書第６集
松島町教育委員会 2016 「瑞巌寺境内遺跡―瑞巌寺岩窟緊急保護工事に伴う発掘調査報告書―」 松島町文化財調査報告書第７集
松島町教育委員会 2018 「瑞巌寺境内遺跡―瑞巌寺参道再生工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ―」 松島町文化財調査報告書第９集
三浦一泰 2019 「塩竈石の物語」市民が作る塩竈歴史案内第５集　NPO みなとしおがま
宮崎町教育委員会 1990 「切込窯跡―近世磁器窯跡の調査―」宮崎町文化財調査報告書第３集
宮城県 1961 「昭和 35 年 5 月 24 日チリ地震津波調査報告」
宮城県教育委員会・宮城県道路公社 1987 「硯沢・大沢窯跡ほか」宮城県文化財調査報告書第 116 集
宮城県防災会議地震対策等専門部会 2012 「第四次宮城県地震被害想定調査報告書（中間報告概要版）」宮城県危機対策課
茂木裕樹 2018 「勝画楼ならびに洗眸閣について（備忘）」
森田義史 2013 「仙台圏域における近世瓦の一様相」白門考古論叢Ⅲ
森田義史 2018 「全国織豊期城郭瓦基準資料集成―東北地方№.６瑞巌寺―」織豊期城郭研究会
山崎信二 2008 「近世瓦の研究」同成社
渡辺裕子・小野弘子 2017 「勝画楼の歴史」市民が作る塩竈歴史案内第２集　NPO みなとしおがま

調査前の状況（北から）

建物跡の検出状況（北から）

建物跡の検出状況（東から）

図版１　御釜神社境内遺跡調査１

建物跡東辺・南辺の状況
（東から）

建物跡東辺・北辺の状況
（東から）

建物跡全景（東から）

図版２　御釜神社境内遺跡調査２

建物跡東辺・北辺の状況（東から）

建物跡西辺の状況（南から）

建物跡南辺と玄関跡（西から）

建物跡西辺・北辺の状況（北から）

図版３　御釜神社境内遺跡調査３

凝灰岩切石のほぞ穴（北から）

建物跡玄関（東から）

建物跡北辺と整地粘土層
（北から）

図版４　御釜神社境内遺跡調査４

Ｃトレンチ東壁の状況
（西から）

建物跡内北東隅の
掘下げ状況（南から）

洋釘の出土状況
（建物跡内第５層上面）

図版５　御釜神社境内遺跡調査５

1

2

3

4

5

6

7

8

9

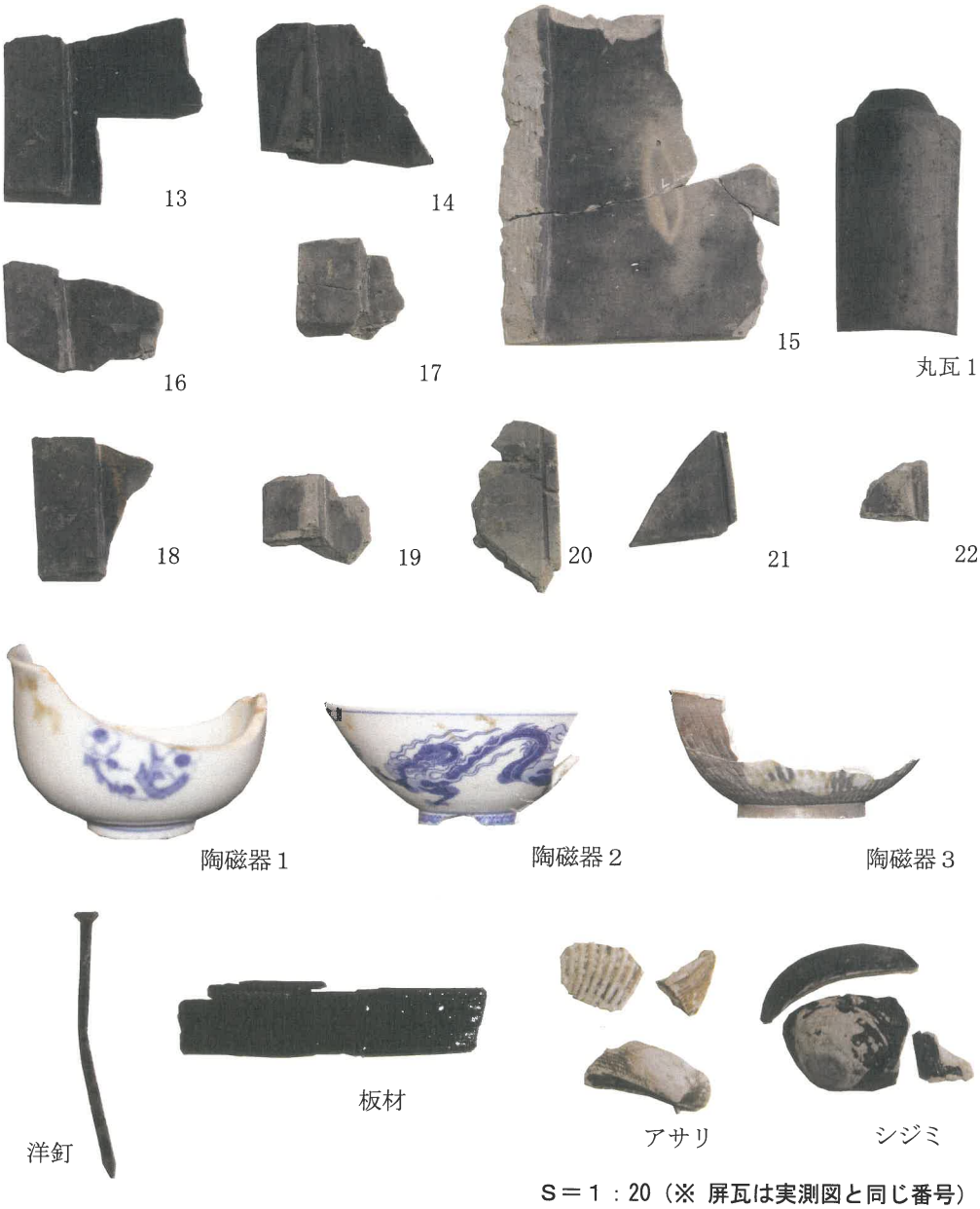
10

11

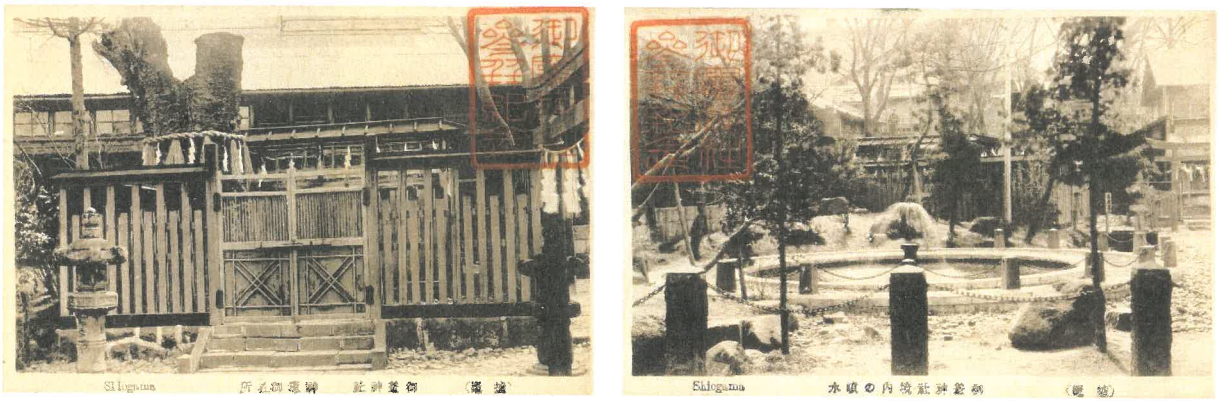
12

S＝１：20
（※ 実測図番号と同じ）

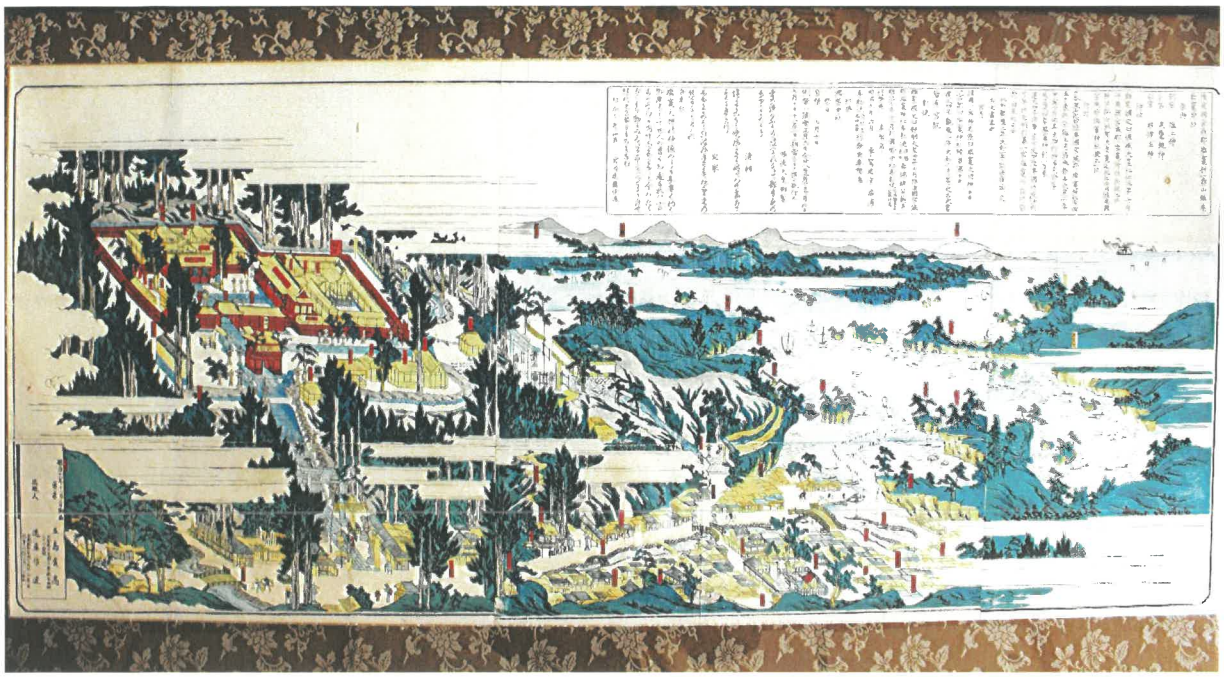
**図版６　御釜神社境内遺跡出土遺物１**



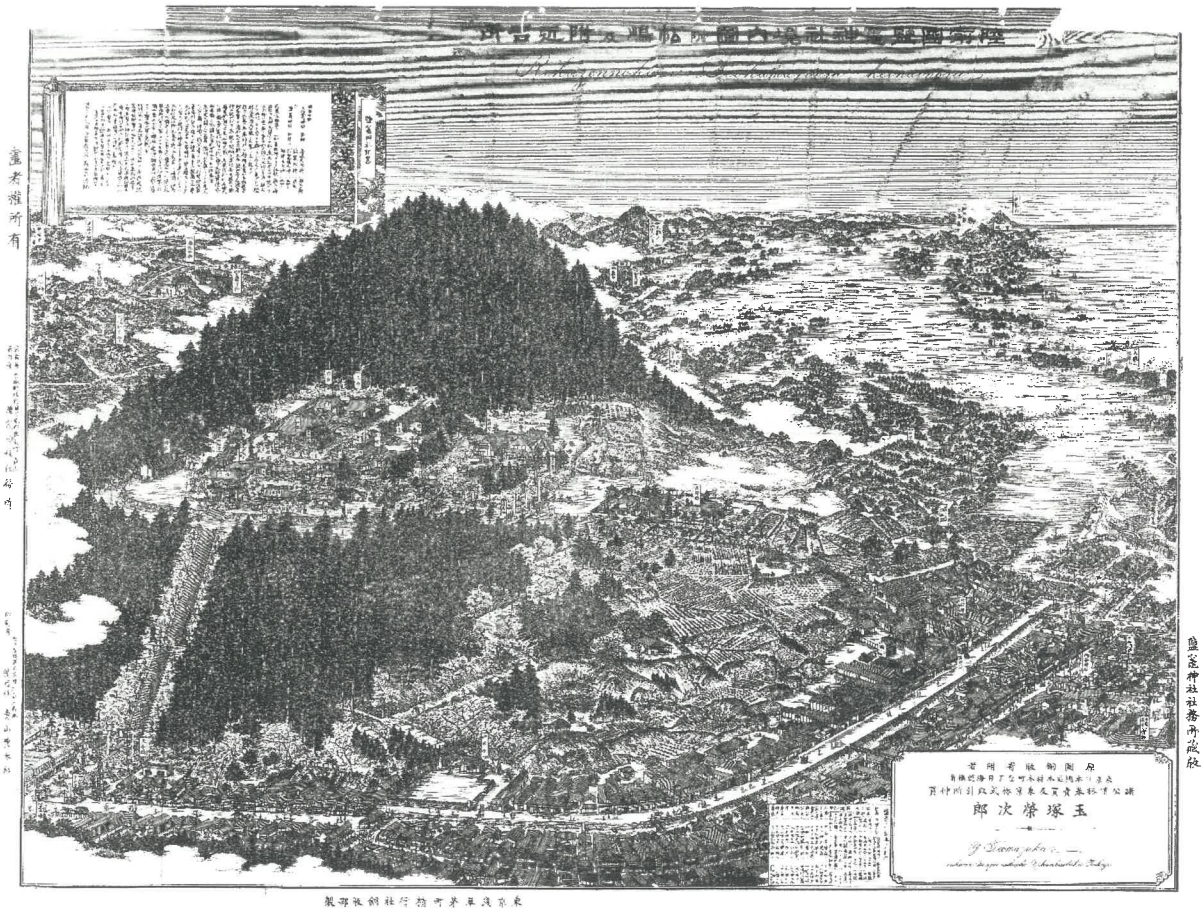

**図版７　御釜神社境内遺跡出土遺物２**



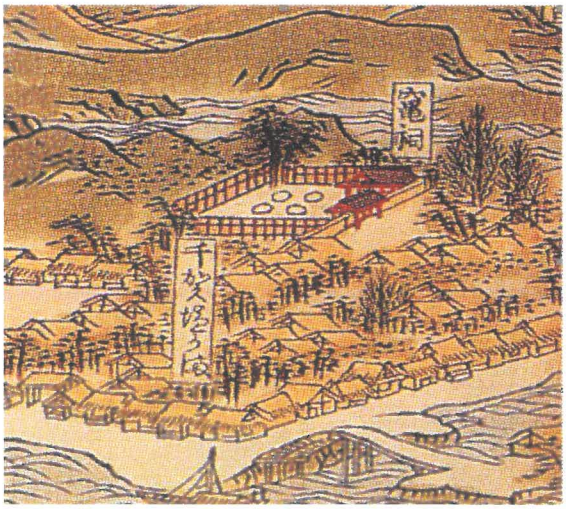
**図版８　御釜神社絵はがき（神釜と噴水）**

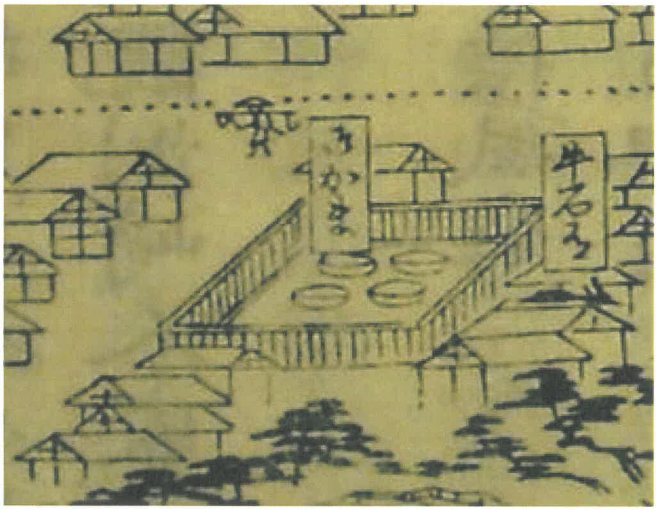


図版９　陸前國宮城郡塩竈村一森山鎮座鹽竈神社《版画》（塩竈市図書館蔵）




図版 10　明治 33 年・陸前國鹽竈神社境内図附松嶋及附近名所（鹽竈神社社務所発行）





①佐久間洞巌　「陸奥國塩竈松島図」（1728年）　②長久保赤水　「東奥紀行（塩竈）」（1760 年）

③作者不詳　「塩竈松島図屏風」（18 世紀）

④坂口員正「陸奥紀行（千賀浦塩竈社）」（1796）

① 九州大学附属図書館蔵

② 鹽竈神社博物館蔵

③ 福岡市美術館蔵（黒田資料）

④ 東北大学附属図書館蔵

図版 11　江戸時代中期とされている御釜神社を描いた絵図（部分）

塩竈市文化財調査報告書第12集

御釜神社境内遺跡

東日本大震災で被災した御釜神社社務所の
建て替え工事に伴う遺跡確認調査

令和３年９月24日　印刷
令和３年９月30日　発行

発行　塩竈市教育委員会
宮城県塩竈市本町１番１号　壱番館３階
TEL：022-362-2556／FAX：022-362-2556

印刷　株式会社 工陽社